

『出雲国風土記』 島根郡の「中鑿南北船猶往來也」

服部 且

一

『出雲国風土記』の島根郡には「中鑿南北船猶往來也」という、注意を引く一文を伴った島がある。この文を伴った島は『出雲国風土記』においては、島根郡下の「衣嶋」・「稻積島」・「蘇島」の三島だけであり、また他国の風土記にも例を見ない。右の文章の意味はまだ十分に解明されていないので、ここに検討を加えてみたい。最初に、三島の前後の記事も含めて引用する（秋本吉郎氏校注日本古典文学大系本による）。

- 1 須義濱 廣二百八十歩
- 2 衣嶋 周一百廿歩 高五丈 中鑿 南北船猶往來也
- 3 稻上濱 廣一百六十歩有二百姓之家
- 4 稻積嶋 周卅八歩 高六丈有松木之嶋 中鑿 南北船猶往來也
- 5 大嶋廣
- 6 千酌濱 廣一里六十歩東有松林 南方祭家 北方百姓之家 郡家東北一十七里一百八十歩 此則所記前度隠岐國津 是矣
- 7 加志嶋 周五十六歩 高三丈有松
- 8 赤嶋 周一百歩 高一丈六尺有松
- 9 葦浦濱 一百廿歩有二百姓之家
- 10 黒嶋生三葉菜 海濱

- 11 龜嶋同前
- 12 附嶋 周二里二十八歩 高一丈有松權照蘇島津都波也 其頭高者 正月元日生 長六寸
- 13 蘇嶋生三葉菜 海濱 中鑿 南北船猶往來也
- 14 眞屋嶋 周八十六歩 高五丈有松
- 15 松嶋 周八十歩 高八丈有松林
- 16 立石嶋廣
- 17 瀬崎磯 所謂瀬 是也

注(1) 秋本吉郎『風土記』一四四〜一四六ページ、岩波書店、昭和三十三年、東京。

二

まず、「中を鑿ちて云々」の意味を諸注釈書に求めると、岸崎時照の『出雲風土記抄』（桑原文庫本）にはまだ何も記しておらず、内山真龍の『出雲風土記解』も「中鑿以下九字、稻積島蘇島の文と三處全同、地状同しかるへし」とのみ記し、考察は進んでいない。既成の諸注釈を批判的に集めつつ新見を加えた、後藤蔵四郎氏の『出雲国風土記考証』は、

洞内を船で通り抜けられるといふ意味か、島と陸との間が辛うじ

て船を通されるといふ意味かわからぬ。稲積島や其他にも同様な記があるが、どうも其の島の中が通られるとは思はれない。⁽²⁾と初めて関心を示しているが、明確な意見は述べていない。加藤義成氏の『出雲国風土記参究』に至り、衣嶋の箇所、

今の菅浦湾にある鞍島であろう。二島が接近しているのは鞍のよりに中央の低い所を穿って船の通るようにしたものと思われる。⁽³⁾また、蘇嶋のところ、

築島の西南に相接した二つの小島がある。これがもと続いていたのを彫り通し、船が通れるようにしたのだろう。⁽⁴⁾

と、その意味についてかなりはっきりとした意見を述べておられる(初版本も文章は同じ)。

次に、秋本吉郎氏の日本古典文学大系本は「中を鑿ちて」を注釈して、「島の中間に船のゆききする程の切れ目のあることをいう。」⁽⁵⁾とし、また、「船猶往来也」を注釈して「船のままで通れる。」⁽⁶⁾としておられる。

加藤氏と秋本氏とは、「中を鑿ちて」が島をトンネル状に掘ったものでもなく、また、島と陸との間が辛うじて船が通れたものでもなく、島の中央部を掘ったものと解釈している点で一致している。しかし、島の中央部を開鑿した理由は記されていない。島の中央を掘ってまで船を通れるようにした原因は何であったのか、また、三島とも「中を鑿ちて云々」とあるけれども、それぞれ全く同じ理由によるものであろうか。単に、交通の便とした、という解釈だけでは十分ではないように思われる。

私は昭和五十九年四月から一年間大妻女子大学より島根大学に国内留学の機会を与えられたので、この一年間とその後昭和六十年八月に一カ月程島根町に滞在した間に得た知見に基き、問題の三島が今のどの島に当たるか、また、「中を鑿ちて云々」が各々どのような意味を持っているかを研究した。以下にその結果を述べるが、掲載した写真は人間の眼で見た印象に近い標準レンズによるものである。

注(1) 上巻七十丁オ。小野田光雄氏蔵本による。本書の借覧をお許し下さった小野田氏に記して感謝申し上げます。

(2) 後藤蔵四郎『出雲国風土記考証』一三六、一三七ページ、大岡山書店、大正十五年、東京。

(3) 加藤義成『修訂出雲国風土記参究』(改訂三版)、一三五ページ、今井書店、昭和五十六年、松江。

(4) 同右書二三八ページ。

(5) 秋本吉郎第一章注(1)書一四五ページ。

(6) 注(5)に同じ。

三

最初に「蘇嶋」(第一章引用文13行目)を取り上げる。まず、この島が現在のどの島に当たるかを確定する必要がある。そのためには周辺の島々の比定から先に行なわなければならない。しかし、これについては別稿を用意しなければならぬ程の紙幅を要する問題なので、本論文ではこれまでの研究により明らかとなった概略を示すに止めた。

『出雲国風土記』の島・浜・浦は、日本海に面した側では、島根半島東端の地藏崎から東より西に向かって大体は地理的順序に従って記載されている。そして、多くの浜・浦は現在も変らない地名か、または遺称と解される類似した地名によって確実に比定ができる。そして、島については、私が確実に比定できたと思う諸例によると、風土記がその高さや周囲の長さを記している島は、その附近では特に大きく目立つ島である。従って、風土記の記載順序と、今も遺称を伝える浜や浦と、周辺で目立つ島であることが、未確定な島を比定するにあたっての最初の手掛かりとなる。

「蘇嶋」を比定するには、この附近で最も所在の明らかなのが「千酌浜」(第一章引用文6行目)であるから、ここから西へ向かって進んでゆくことにする。「千酌浜」は、今も地名が現存している八束郡美保関町大字千酌(地図(1)・(3)B)である。

「千酌浜」の次に記されている「加志嶋」(7行目)に該当するのは、千酌の北にあり、附近でも目立つ白カスカ島(地図(1)M・(3)D・大字千酌領内)である。この地方の出雲弁を観察したところでは、シ(イ)がス(ウ)に交代する(一)がロに交代し、かつシは強く磨擦する。時にs.とsn.の中間に聞こえることもある)ので、白カスカのカスは加志の転の可能性も考えられる。千酌在住の松本寛太郎氏(明治三十二年生)は白カシカと発音された。なお、白カスカ島の南には地図(3)C(地図(1)の記載は誤りである)の如く白島(松島)という島が見えるが、これは地図(3)では独立した島のように描いているけれども、実際は浅瀬や岩場で陸続きとなっていることと、白カスカ島のような高さがないことから、風土記の「加志嶋」には該当しないと思う。

「加志嶋」の次の「赤嶋」(8行目)は白カスカ島の北に接する黒カスカ島(地図(1)N・(3)E)に当たる。10の「黒嶋」と白カスカ島の中間で最も目立つのは黒カスカ島だからである。この島は全体が赤黒い岩から成るので、風土記時代には赤島と呼び、現在では黒カスカと呼ぶのであろう。

「黒嶋」(10行目)は今も同じ名を残す美保関町大字笠浦の黒島(地図(1)O・(3)F)である。この島は玄武岩質の岩から成っているので、黒カスカ島が赤黒いのは異なり、真黒に見えるのが特徴的であるからこの島名が生まれたものと思われる。

次に「亀嶋」(11行目)を取り上げる。笠浦の湾内の人家近くにかつて亀島と称する岩があったが、これはごく小さな岩礁であることと、記載順序(「黒嶋」の西でなければならぬ)からみて当らない。これは地図(1)Q・(3)Hのサザエ島(大字笠浦領内)か地図(2)Vの大ゾ島であろう。サザエ島説は『参究』が既に説いているが、私は大ゾ島(地図(2)V、写真(10)島根町大字野井領)の可能性もあると思う。大ゾ島かどうかは、後述する「蘇嶋」の比定如何にかかわってくる(第七章附説参照)ので決定的なことは言えない。

「附嶋」(12行目)は、風土記の記す島の大きさや植物の記載の量から考えて、島根半島の日本海側で最大の築島(地図(2)S、写真(1)G・(2)A・(3)B。大字野井八地図(1)R▽と瀬崎八地図(2)E。大字野波所属▽に属す)である。築島は後述の如く「附嶋」の遺称である。

こうして「附嶋」の次に記された「蘇嶋」に達したから、今度は逆に西から東に向かって島の比定を行なうことにする。最初に、「瀬崎」(17行目)は島根町の瀬崎(地図(2)E)であることは動かない。この崎は地図(2)Eに「瀬崎」と記された人家の部分だけではなく、北の「波高」(地図(2)D、写真(3)H・(8)A)・「コエドリ」(地図(2)C)の突出部に及んでいる。

「松嶋」(15行目)は、瀬崎附近で目立つことと、「有松林」と注していることから、今も沢山の松が生えている同名の松島(地図(2)A、写真(8)C)である。

「立石嶋」(16行目)は、「松嶋」と「瀬崎」の中間に記されていることと、瀬崎の岬附近にはこれ以外にめぼしい島がないことから、地図(2)B、写真(8)Bの馬島(瀬崎領)に該当する。島の位置からすると「松嶋」の前に記載されるべきだが、風土記では順序が逆になっている。先に「大体は地理的顺序に従って記載されている」と述べたゆえんである(他にもこのような例がある)。

「真屋嶋」(14行目)は、松島・馬島と築島との間で目立った島としては、地図(2)P、写真(2)Bの横島(瀬崎領)以外にないので、これに該当する。

以上から、問題の「蘇嶋」は、「附嶋」と「真屋嶋」の中間に記されているところからして、今の築島と横島の間を求めなければならぬ。なお、風土記の島々をこうして比定したが、これらは総て現存する島ばかりである。風土記の時代には現存する島以外にも大きな島があったが、今日までの間に侵蝕され、あるいは水没して、今では水面下に暗礁のような形で残っているのではないか、という疑問が起るかもしれない。しかし、本章で取り上げた各々の島の属する村を回り調

査したところ、それに当たるような大きな暗礁はないことが判明した。

注(1) 梨、死ぬ、など。

(2) 千酌のチはツ(強く磨擦する)に交代し、ミはムに近く聞こえる。國広哲弥氏の「島根県方言の発音」の母音構造図によれば、出雲地方の「 ϵ 」の距離は、東京・益田地方並びに五箇・都万地方(隠岐島)に比して近く、イは「東京方言などのイとウの中間音」とある(『島根県方言辞典』二〇、三三ページ)。島根町瀬崎では千酌をツクンと発音する(瀬崎在住伊達隆恭氏ご教示)。風土記「千酌駅家」の条で千酌の地名起原を都久豆美命に求めている話は、加藤義成氏が既に指摘しておられる(第二章注(3)書一九四ページ)ようにこの出雲方言とかかわっている。

(3) 島根町大字野井在住の村上良一氏(大正五年生)も白カシカと発音された。美保関町大字笠浦在住の船越亮氏(大正七年生)の場合もシとスの中間のような発音(本章注(2)参照)をされた。また、島根県立図書館蔵『島根郡村誌』(明治十四年、島根県編、和本)には現在の地図とは異なり「白カシカ」・「黒カシカ」と記されている。但し、これらのカシが風土記の「加志」を今に伝えるものかどうかは別の考え方もできる(で速断はできない(詳細は別に譲る))。

四

本章では昭和五十九年八月以降、「蘇嶋」に当たる島があると予測される、島根町大字野井に通ってこの問題を調査したので、その結果を述べたい。野井においては、野井漁協組合長の渡部弘美氏に格別のご配慮を賜ったことを感謝申し上げる。

まず、「中を整ちて云々」のような条件を備えた島が附近にないかどうかを渡部弘美氏(大正十四年生)にお尋ねしたところ、渡部氏は私を船外機の小船に乗せて、築島の東北端にある梶島(地図(2)W、写真(1)D・(7)・(10)B)に案内され、「船が島の中を通行しているのはここだけだから、『蘇嶋』に当たるのはこの梶島と思う。」と言われた(昭和五十九年八月十二日調査)。

この島には二つの洞窟が南北に貫通しており、そのうちの中央のも

の(写真(1)E・(10)C)は船で通り抜けることはできない。梶島の西端にあるもう一つの穴(写真(7)・(10)D)は地図(2)に点線の矢印で示した如くに貫通しており、写真(7)のように小船が通行している。この穴を渡部氏と共に実測したところ、高さ六メートル、巾四・五メートル、長さ二一・五メートルであった(昭和六十年八月九日調査)。確かに、ここは私が乗せて頂いた、長さ七メートル、巾一・五メートル程、吃水三〇センチ程度の小船ならば楽に潜り抜けることができる(写真(11))。

しかし、前章で述べた風土記の記載順序からみて、「蘇嶋」を梶島に比定するのは疑問に思った。また、地図(2)によれば梶島は築島から完全に分離しているかのように描かれているが、二つの島の間は岩場と、右述の船外機船よりもさらに小型の船でも航行できない極めて浅い浅瀬と岩場が繋がっており(写真(1)矢印F・(7)矢印・(10)E。第七章注(3)参照)、この透き間を南北に見通せる方向から見ると、梶島は独立した島のように見える(写真(1))だけである。

梶島は野井の人家からは遠く離れ、築島の蔭となって村からは遠望できない(写真(2)・(3))沖合の不便な所にある。また、「中を整ちて」は人工的な開整を施したことを意味するが、この穴は長さ二一・五メートルもある天然のものである。

そこで、私は記載順序からみて築島の南西にある二つの小島(地図(2)J、写真(2)CE・(3)E・(8)DG)が該当するのではないかと考えた。加藤氏の『参究』も既に、

蘇島は右(築島：服部)の西南方に相接した小島がある。これがもと続いていたのを彫り通し、船が通れるようにしたのであろう。

と述べておられる。この島を野井の人々は二つ合わせて「二つ島」、時に「二つ岩」と呼んでいる。また、特に区別する時には、西の方を「雀島」(写真(2)C・(8)D・(9)B)と呼び、東の方(写真(2)E・(8)G・(9)F)は特に名を与えていない。『島根町誌資料篇』によれば、西の方を「雀島」、東の方を「二子島」と記している。以下論の都合で区

別しなければならぬ場合は同町誌に基き、東の方を「二子島」と呼ぶことにする。

この二つ島を野井の海岸から指さして、二つ島の間を船が通っていないか、また、間を通ることで何か便利はないか渡部氏にお尋ねしたところ、氏は「あの島の間は現在船は通らないし、あそこを航行することで港に格別の利便があることもない。」と答えられた。地元の歴史に関心が深く、島根町誌編纂協力委員でもある村上良一氏（大正五十年生）にもお尋ねしたが、やはり同じご意見であった（昭和五十九年八月十四日調査）。

注(1) 加藤氏第二章注(3)書三三八ページ。

(2) 村上良一氏によれば、雀島を東方から見ると雀のような形に見えるのでこの名があるという（昭和六十年八月二十九日調査）。

(3) 島根町誌編纂委員会編『島根町誌資料篇』五七〇～五八二ページ、島根町教育委員会発行、昭和五十六年、島根町。両島の中央を境として北側が隣村瀬崎の領分となっており、同町誌によれば、瀬崎では東方のを「えその島」、西方のを「ふたし島」と呼んでいるという。「えその」は「磯の」、「ふたし」は「二つ」の意と思われる。

五

昭和五十九年八月には、「蘇嶋」が二つ島に当たるとはならないかという私の推測を裏づける資料が得られないまま野井を去ったが、やはり納得が行かなかったので同じ年の九月二十三日に再び訪問した。今度は、別の角度から調査したところ興味深い収穫があった。本章ではこれについて報告したい。

私は築島の名称からある直感が働いたので、築島の畑作について渡部弘美氏と夫人の美恵子氏（大正十五年生。以下渡部夫人と記す）にお尋ねした。野井の人家の向かい（東北）約六五〇メートルには築島が大きく浮んでいる（写真(2)・(3)B）。この島にはかつては沢山の畑があり、昭和三十八年か三十九年頃までは野井と瀬崎の村人が盛ん

に耕作した。しかし、附近の海岸一带に昭和三十八年か九年頃イタヤ貝が異常な程大量に発生し、村人達はこれ採取加工して出荷するの(2)に多忙を極めたことから、築島や陸地の畑を荒すようになった。その頃から出稼ぎの仕事なども沢山行なわれるようになった（高度成長による）ことと相俟って、築島の畑は昭和五十四、五年頃からは全く放置され、今日では写真の如く完全に林や藪に帰してしまっ(3)た。それは、畑に適した地形の所は総て島の頂上まで耕地に(4)されていた。

野井の東南の大字笠浦（地図(1)P・(3)G）から北西の瀬崎（地図(2)E）にかけての陸側の土は赤土で土質が悪いのに対し、築島は黒土(3)で土質が良いため作物には好適であった、と渡部夫人は言われる。築島では、薩摩芋、麦、種々の野菜、桑などを作っていた。特に島の南部には海拔七〇メートルの高くて広い斜面（地図(2)R、写真(2)H・(3)C）があり、この作物は本土よりも早く成長し、また、作物も良かった(4)そうである。

そこで、渡部弘美氏のご紹介により島根町産業課課長松本正志氏に築島の畑の面積をご調査頂いた。その結果、明治二十一年の土地台帳によれば七町六反八畝の畑があった(5)（田はない）。渡部氏によれば、島根県の日本海岸側の島でこれ程多くの畑のあったのは築島だけである。

この農地に適し沢山の畑のあった築島では、古代にも同様に多くの畑が作られたのではないかと考えられる。風土記の「附嶋」の割注に「其齋頭蒿者正月元日生長六寸」とある。齋頭蒿については別に述べる必要があるが、紙幅の都合で結論を述べると、これはやはり既説の如く今のヨメナに当てて良いと思う。このヨメナが正月元日に六寸まで成長しているというのは、土地の者でなければ絶対に判らない事柄であって、この島に人々が頻りに通っていたことを示している。

風土記の「附嶋」を諸注釈書が「つきしま」と訓を附しているけれども、私が初めて野井を訪れた時に渡部氏が「ここでは『つきしま』ではなく『つくしま』と呼んでいます。」と言われたことに注目した。

その後、築島は陸から六五〇メートルほど離れてはいるが、写真(3)の如く山が海に迫まって水田は極めて乏しく(注(5)参照)、段々畑を山の中腹まで、低い所では頂上まで(写真(3)Iに今も段々畑が見られるが、家用に野菜を僅かに作っている程度である)作っていたかつての野井の村(や瀬崎)では、この島が貴重な耕作地となっていたということを知るに及んで、私は「つくしま」の「つく」は『和名抄』の「佃(中略、服部)作田也(中略、服部)豆久太」の「豆久」であり、「附嶋」の語源は「耕作する島」あるいは「耕作している島」であろうと考えるに至った。

このように築島での耕作について渡部夫妻にお尋ねしていると、やがて渡部夫人は先の二つ島に関して次のようなことを思い出して下さった。即ち、この地方では築島へ耕作に出かける必要などから、かつては女性も櫓船を漕ぐことができた。そして、野井から築島の北西側の畑を耕作に行く時に、村人は二つ島の間を航行した。地図で見ると、二つ島の中間を抜けるのも、西側を回るのもさして変りがないように思われるが、二つ島の間を通った方が近道になったからである。

注(1) 隣村の大字笠浦在任の船越亮氏によれば、昭和三十九年である。笠浦でもイタヤ貝の大量発生が要機のひとつとなり、農業が衰退したという。

(2) ホタテ貝に似た二枚貝の一種。肉は食用、貝柱は乾物となる。貝殻はかつては杓子に用いた。

(3) 島根大学法文学部の小畑浩氏(地形学)にこの点をお尋ねすると、築島の基盤が安山岩質であるのに対し、対岸の野井から野波(野井の西南一・五キロ)にかけては酸性凝灰岩が基盤である(国土地理院「表層地質図」による)ので、前者の土壌は黒っぽくなり、後者はより薄くなる、とのことであった(昭和五十九年九月二十六日私のご教示)。

(4) 渡部夫人によれば、ここでは大根の出来が特に良かった。益過ぎに大根の種を播き、十二月から抜き始めて一月には収穫を終えた。大根の後にはジャガ芋、その後は益までカボチャを作った。敗戦後までは盛んに養蚕を行なったので桑畑も多かった。

上代の栽培作物としては、『古事記』に遊富泥(大根)・加美良(韭)・

波土加美(椒)阿哀那(青菜)その他が見える。『和名抄』(二十卷本)巻十七に園菜類野菜類の項があって、計三十二種類挙げており、その他蘆類芋類草類の項も加えて合計すると六十五種となる。稲穀部には稲類・米類・麦類・粟類・豆類・麻類の項があって、ここにも多数の種類が見られる。

(5) 明治二十一年の土地台帳によれば、

野井地区

田 三町七反十四歩

畑 五十町五反七畝二十九歩

この内築島の畑は

五町三反一畝十五歩

瀬崎地区

田 四町七反九畝六歩

畑 二十四町六反七畝三歩

この内築島の畑は

二町三反六畝十五歩

である。土地台帳からの集計については大変なご苦勞をおかけしたものと拝察する。松本正志氏を初めとして産業課の方々に厚くお礼申し上げます。

(6) 『元和三年十活字版倭名類聚抄』二二二ページ、勉強社、昭和五十三年、東京。

(7) 島根町大字加賀でもかつては女性も船を漕いだという話を聞いた。ノリ摘みは主に女性の仕事であったから、船が漕げたのは野井・瀬崎に限ったことではなかったと思う。

六

そこで、渡部弘美氏に二つ島へ船を出して頂いた(昭和五十九年九月二十三日)。写真(8)は地図(2)I地点から二つ島を望んだものである。二島間の水路が進行方向の真正面(真北の方向)に見える。現場に到着して種々お尋ねしているうちに、渡部氏は非常に興味深いことを思い出して下さった。

即ち、二つ島の北方約一〇〇メートルには、築島の竹尻鼻たけしりびなという岬が西方に出ている(地図(2)M)。この岬の西端は水深が約九メートルあるが、その西方の沖合五、六〇メートルの所には浅瀬(地図(2)L)。

がある。かつて築島の北西側の畑へ行く野井の村人は、地図(2)Oの「大ワダ」に着船した。そこで、この大ワダと野井の村を往復する際には、近道となるだけでなく、波の立ちやすいLの浅瀬を避ける上からも、二つ島の間を南北に真直ぐ航行する必要があった。

浅瀬に波の立っていない時でも、前述の通り雀島(写真(8)D・(9)B)の西を回るよりも時間が早かった。以前は村の働き盛りの男達は皆出稼ぎに出てしまっていたので、畑をする者は村に残った女達と老人だけであった。この腕力の弱い人々にとっては、二つ島の水路を抜けるのと、西側を迂回するのでは相当に労力が違ったという。

特に渡部氏が現場で実際に操船して示して下さった、北風が吹いた時のことは貴重であった。即ち、築島の「大ワダ」に船をつけた老人や女達は麦や芋、桑の葉などを入れた大籠を船に乗せて村へ帰る。大籠を積んでいるだけでも操船は難しくなるのであるが、竹尻鼻の先端を回ると目の前に二つ島の水路が見えて来る(写真(9)D)。この時に北風が吹いていると、風を背に受けて真直ぐに水路を抜け、労力も余り使わずに村へ帰ることができた。写真(9)はこのことを追体験している時のものであり、写真(9)Aは地図(2)Fの人家部、写真(9)Cは地図(2)Gの港である(写真(3)も参照されたい)。

この時波の立ちやすい地図(2)Lの浅瀬に向かうのは波の危険ばかりでなく、大籠などの荷物を積んだ吃水の浅い小船は北風を斜めに受けることになるから、操船が非常に困難となる。当日の九月二十三日(北風は九月から頻りに吹くようになる)には実際に北風が吹いていた。最初に小船(長さ七メートル、巾一・五メートル程、吃水三〇センチ程度)を二つ島の水路の北側で静止させ、舳先をそのまま北に向けてみた。この時にはさほど風圧を感じなかった。次に、少し船を横に向けてみたところ、船腹に風を強く受けてたちまち流され始めた。従って、特に北風の時に雀島の西を回るのは、船の横方向から風が当たることになって操船が困難となるし、とりわけ荷が多い時には危険となる。以上から風圧を少なくする上からも、舳先や船尾を北(南)に

向けている必要があることが判った。

後にも述べる予定であるが、二つ島の水路の水深は浅く、長さ十メートル未満の船外機船しか通れない。渡部氏は、小型でも舟底からスクリーンの出ているものはスクリーナーが海底の岩に当たる危険があるので通行できない、と言われる。二つ島の水路を渡部氏にご助力頂いて昭和六十年八月九日に実測(第一回目)したところ、二島の最も狭まい所の中は一三・四二メートルであり、水深は浅い所で二・二八メートル、最も深い所で二・八五メートルであった。なお、両島の高さは雀島が一・四メートル、二子島が五・二メートルであった。

写真(8)でも判るように、雀島から二子島に向かって岩盤が降りて来ており、海底でもそのまま二子島に向かって斜めに下っている。二子島の方は写真では判定し難いが、海面から雀島に向かって岩盤が斜めに下っている。両島の間はゆるやかなV字状をなしており、中央から少し雀島寄りの所で最も深くなっている。両島の間は潮の流れが早くなるため、手漕ぎ船の時代には潮流に逆らって通り抜ける際に誤って櫓を海底に当てることがあった、と渡部氏は言われる。

こうした地形から考えると、「中を鑿ちて」とは一つの島を切り割るような大工事ではなく、水面上か水面下で辛うじて繋がっていたのを小船が航行できる程度に掘り下げたか、または、ほとんど現在の地形に近いもので、櫓の当たる浅い場所を掘り下げたものと推測される。

二つ島の水路の通行について、渡部夫人はさらに次のようなことをお話下さった。即ち、ここを抜けたのは先に述べた築島北西岸との往來の時ばかりではなかった。強風により築島南岸の字向前の海岸(地図(2)Q、写真(2)G)に着船できない時(北東風)や築島北西岸に着船できない時(北西風や西風)には、地図(2)Nの竹尻の湾ほどの風でも風になる場所なので、人々はここに着船してから各々の畑に向かった。この竹尻の湾と野井の村の間を往復する時にも二つ島の水路を利用した。地図で見ると、築島と二子島の間が開いている(地図(2)

K、写真(2)F・(3)D・(8)H)ので、竹尻の湾へ行くにはこの間を航行するのが近道のように見えるが、実際には浅瀬となつて利用できない。

注(1) 二子島の高さは、私が岩石と植物の調査をしている間に渡部弘美氏が測つて下さつた。写真でも判るように雀島の高さとほとんど変わらないように見えるので、この数値は氣になる。

(2) 美保関町大字菅浦在住の井川正善氏(明治三十九年生。漁業)によれば、櫓船は昭和四十五年頃まで使用し、その後は船外機船が普及したという(昭和五十九年十月調査)。

七

以上により、「蘇嶋」は現在の二つ島に該当し、「中を撃ちて」の意味についても解明できたように思われるが、なお若干の問題が残っている。即ち、築島の東に大ゾ島・小ゾ島(地図②V、写真(1)AC)という二つの島が並んでおり、この間の水路(写真(1)B)も南北に通っている。そこで、本論文で取り上げた風土記の島々の名は現在も全く同じか、あるいは何らかの関連があると思われるものが多いので、大ゾ島が「蘇嶋」に当たる可能性はないか、という問題が起つて来る。

これに関しては、昭和六十年八月に調査した結果を述べたい。即ち、大ゾ島と小ゾ島の水路の巾を渡部弘美氏と共に実測した(八月九日)ところ二四メートルであった。二つ島の水路巾よりも相当広い。この間を船が通行したか否か渡部氏にお尋ねすると、今は大ゾ島(写真(1)A)から南南東に向けて定置網の主綱が出ているので、ここを通ることはないが、櫓船の時代には沖へ出る時や、沖からの帰りの時も風向きによってはこの間を通つて港へ帰つた。その方が小ゾ島の東を回るよりも労力が軽減された。しかし、大ゾ島と築島の間に大きな水路があるから、常に大ゾ島と小ゾ島との間が利用された訳ではなかつた、とのことであつた。

次に、両島の間は開鑿によつて出来たものか、とお尋ねすると、渡

部氏はこれを強く否定された。即ち、二つ島の岩質は軟らかくて現在も風化により自然に所々大きく剥落しており(写真(13))、水路の水深も浅いので開鑿は可能であつたかも知れないが、大ゾ島・小ゾ島の場合は岩質が非常に堅く、水路の巾も広く且つ水深も大変深いので、そのような工事は不可能だつたらう、と力説された。渡部夫人も、小ゾ島にもノリ摘み場はあるが、沖合の波の荒い所であり、また両島の水路が非常に深く、場所によつては海底が凸凹しているので錨の上らないこともあるため、ノリ摘みには上陸しにくい所である。そのような所が人工で開鑿されたとも思われぬ、と否定された。八月九日に渡部氏と共に両島のほぼ中間地点で水深を実測したところ(第一回目)、一一・七メートルであつた。

渡部氏が岩質の違いを強調されるので、この点も観察した。雀島は全体にレンガを積み上げたように節理が縦横に走っており(写真(14)A・(13))、述べたように風化により次々に剥落している箇所がある。島のどの部分もタガネを入れると簡単に岩が割れる。東方の二子島の西側の岩肌は、雀島(写真(14)A)よりももっと細かい節理(写真(14)C)の黒っぽく見える部分)が見られた。採取した岩片を島根大学教育学部三浦清氏(地学)にご鑑定頂いたところ、二つ島の岩は両島共同の安山岩系統の岩である。硬度は少しばかりの岩片では確定的なことは言えないが、採取したものは両島とも同じ程度である。二子島の方に白っぽい岩が見られる(写真(14)D)のは、やや熱性変質を受けているからである。岩が軟かいのは風化によるものである、とのことであつた(昭和六十年八月二十八日私的ご教示。以下同じ)。

大ゾ島・小ゾ島の岩は八月二十八日に渡部氏のご協力により採取した。両者共二つ島の岩が茶褐色であるのに比べて黒々としており、岩質は極めて堅い。二つ島のような節理は全く見られず、一ミリ程の線状の窪みを狙つて小型のツルハン(タガネでは歯が立たない)を打ち下ろしてやつと採取できた。三浦清氏のご鑑定によれば、これも安山岩であるが硬度は二つ島よりも固い。これは風化を受けていない新鮮

な岩だからである。

人工的開鑿の可能性についてもお尋ねすると、大ゾ島・小ゾ島の岩が堅いのはむしろ軟かい場所が人為的に全部削られてしまったり、波でさらわれてしまったりして残っているのかも知れない。現在の状況では節理面の出ている二つ島の方がタガネが入りやすく人工を加えやすいと言えるが、そうしたことよりも、岩肌をタガネの跡や、人工を加えられたために不自然になっているような地勢を見つけ出すべきである、とのご意見であった。

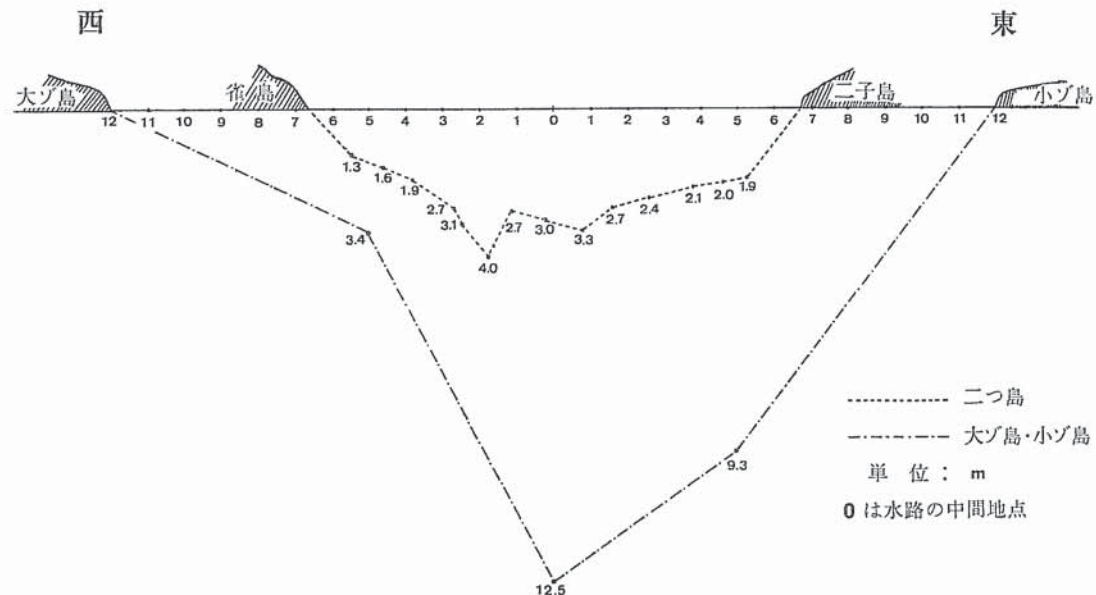
そこで、今度は八月二十九日に村上良一氏のご案内で渡った。写真(1)（水路を南方から撮影）の如く、Cの小ゾ島は平坦な岩場だけである。Aの大ゾ島は中央からやや西に寄った方が高さ八、九メートル（目測）と高くなっており、西端部と東側半分（小ゾ島側）は小ゾ島のように平らになっている（写真(10)A）。水路附近の岩肌は常に波に洗われており、タガネの跡は無論、人工により不自然になっていると思われる場所も認めることはできなかった。

二つ島の方もタガネの跡と思われる所は認められなかったが、既述の如く、雀島の水路側の岩盤が斜めに下りて来ている（写真(8)・(9)）のに対して、二子島の水路部分一帯（写真(8)F・(9)E・(12)矢印）の垂直な所が、人工の加えられた跡と見えなくもない、という程度である。

岩石は二つ島の方が全体的に軟らかく、実際の波が絶えずかかる所も同程度に軟らかい。大ゾ島・小ゾ島のように固く黒い岩はどこにも見られない。従って、風化しやすく、また人工を加えやすい軟らかな岩が大ゾ島・小ゾ島の場合はほとんどなくなり、二つ島の場合は完全に残っているというのも、両者の波の荒さ（後述）に違いがあるという条件を考慮しても、なお不自然な印象を受ける。

そこで、村上良一氏と共に、前回渡部氏と行なった時よりもさらに詳しく二つ島と大ゾ島・小ゾ島の水路の水深を測った（八月二十九日調査）ので、その結果を図(一)に示す。二つ島を実測したのは午後四時三十分頃で、この時は満潮時にあるので干潮時には五〇センチ程浅く

図(一) 大ゾ島小ゾ島間水路と二つ島間水路の水深比較（昭和60年8月29日調査）



なる、と村上氏は言われた(冬期はさらに浅くなる)。二つ島の水路の最も狭い所で測ったが、前に述べたように潮の流れの早い場所であるから、ロープを垂している間でも若干流されるので正確な直線上にはならなかった。大ゾ島・小ゾ島間の実測は午後五時二十分頃であった。ここは二つ島以上に潮の流れが早いので、同様に計測地点を一直線上に整えることはできなかった。

その結果、水路の巾は大ゾ島・小ゾ島の方が約一〇メートル広く、水深も最も深い所で三倍強、最も浅い所でも三倍弱と両者には大差のあることが判った。また地理的条件に於ても両者には差のあることを知った。即ち、調査の日は好天気で港の周辺ではさして風波を感じなかったが、潮の流れは早いとは言え、二つの島の場合は図の如く沢山の計測地点を求めることができた。これに対し、大ゾ島・小ゾ島は格段に早く、また二つ島周辺にはなかった波のうねりが相当に強いため、船を静止させることは無論、船上でロープをたぐる作業も船が大きく揺れて落ち着いてできなかった。大ゾ島・小ゾ島の計測地点が三カ所と少ないのはそのためである。地図で見ると、両島への港からの距離は大差ないが、現場に立つと、二つ島の方がまだ内海にいますという印象を受ける(写真(2)(3)参照)のに対し、大ゾ島・小ゾ島は波が高くうねりも大きいので、外海に出ているという感じがする(写真(1)参照)。

調査時のような好天でも述べたような具合であるから、荒天の時には大ゾ島・小ゾ島には接岸などできない。一方、二つ島は可能である。渡部弘美氏は、冬の釣客をこの島にも連れて行けない時、二つ島は築島と瀬崎の岬で風蔭となつて安全であるから案内する、と言われた(私も二月の西風の吹き荒れる時に二つ島の上に釣人がいるのを目撃した)。以上から、風土記時代に大ゾ島・小ゾ島を切り割ったり、掘り下げたりするような難工事が行なわれたと推定することは全く不可能であつて、渡部夫妻がこの水路が天然のものである、と強調されたことも十分納得することができた。

附 説 「蘇嶋」と「亀嶋」の比定の問題

かようにして、「中を鑿ちて」と記した「蘇嶋」⁽¹⁾はやはり二つ島に比定すべきであることを確認した。しかし、「ソ島」という名称がやはり気になる。ただ、村上良一氏の保管しておられる氏神(兩佐加志能為神社)地図(2)H√)関係の古い文書に「皇土島」とある(注(3)参照)のを拝見した(昭和五十九年九月二十三日調査)ので、オウド島の名が古く、大ゾ(蔵とも表記)島はその転とも考えられる。しかし、それでも小ゾの方が十分に説明できない。「蘇嶋」に大・小を冠すると現在の名称になるのが注目される。

そこで、「蘇嶋」は今の(大・小)ソ島に当たりますが、「中を鑿ちて」の方は今の二つ島に関する記述であつて、風土記は二つ島に当たる島の名を脱落させたという可能性も考えねばならない。後述の「衣嶋」の例があるからである。しかしながら、その場合は「蘇嶋」を「附嶋」の次(西)に記していることが問題となる。先述の如く(第三章)、「松嶋」と「立石嶋」(今の馬島)の記載が前後しているけれども、これは両島がごく近接しているので順序が入れ替ることもありうる。これに対し、「附嶋」は格別に大きな島であつて、土地の住民が築島を挟んで東西に離れている両者の位置を誤まつて報告した可能性は低いと思われる。

そこで次のようなことも考慮しなければならぬ。即ち、いつの時代にも好古を趣味とする人物が村々にいたであろうから、そうした人々が本来「蘇嶋」が今の二つ島に与えられた名称であつたのに、後世現在の(大・小)ソ島に比定したことによって名称が移動してしまつた、という可能性である。村上良一氏の保管しておられる文書の中には、「附嶋」については現在の築島としているが、「加志嶋」を梶島(第四章)にするほか、「赤嶋」・「黒嶋」・「亀嶋」・「蘇嶋」・「真屋嶋」・「松嶋」・「立石(嶋)」を総て野井村内の沿岸の小島や小さな岩礁に当て、さらには「葦浦」(隣村の笠浦)まで野井

村内の地に比定しているものがある。⁽³⁾ これなども、後人が何らかの目的で風土記という由緒ある書物に登場する地名を我が村のものとしてしようとしたことによるものであろう。

ともかく、「蘇嶋」についてはこの位で終ることにするが、もし「中を鑿ちて」が現在の二つ島に関する記載で、一方「蘇嶋」が(大・小)ゾ島であったとすると、「亀嶋」は笠浦のサザエ島(地図(1)Q・(3)H)に比定するのが妥当となる。かように「亀嶋」とも係わる問題なので煩を厭わず述べた。

注(1) 秋本吉郎氏の古典大系本は「蘇嶋」を「そ(しま)」と訓み、『参究』は「よみ(じま)」と訓む。『参究』はさらに「黄泉島」と呼ばれた原因については何も述べておられないが、「黄泉島」と呼ぶべきを魂の再生を信じて「蘇」の字を充てたのではないだろうか。とする。出雲郡宇賀郷の脳磯の黄泉之穴は古代の葬地であったことが考古学的な発掘によって明らかとなった。しかし、大ゾ島の平垣部は波の洗う岩場であり、二つ島は平垣地も乏しいほとんど岩だけの小島であるから、どちらも葬地としての条件を欠いている。「蘇」は「(海)藻」の誤写の可能性はないか、大方のご教示を得たい。

(2) 秋本吉徳氏は最近風土記の「故老」について関心を示しておられるが、「故老」の実体も多くはそうした人々を指すのではないかと思う。どの村にも必ず自分の村や周辺地域の事情に詳しく、地域の歴史を好む物知り(私の体験では、出雲ではこうした人物を村の周囲の人々は「好いちよる者」と呼ぶ)がおり、私はいつもそうした人を紹介される。これらの人々は記憶力が良く、観察力や思考力に秀でていて、時には我が村を中心とする感情などから偏った説を持つこともある。風土記だけでなく他の神話や伝説の発生にも、この種の人々が係わっている場合があると思う。

(3) 史料の価値はほとんどないと思うが、登場する地名には消滅したり現代の人々には判らなくなっているものがあるので、注(2)にも述べた思考法の参考として翻字しておく。栲紙の半折に墨書している。転写によるものであろうか甚しい誤字が見られ、筆録者のレベルの程が想像される。江戸時代までは溯らず、転写の問題もあるが原文書も明治初年の作と推定される。

加志嶋 (一行脱?) 是より築嶋渡(後)ニ有此嶋ハ南北三二穴有

ル灘ノ分大穴ナリ尚又漁船通行自在也且離嶋ニ似テ全クハ人ノ飛渡リ自由ナリ故ニ俗ニ加路ノ文字ヲ用ルト覚也 赤嶋 言ハ葦浦ノ船越ニ明白也船越トハ瀬崎ノ通船場所也依テ俗ニ船越ト申伝ト云尤海中ニ浮嶋ナリ平キ赤色ノ嶋ナリ 葦浦 言ハアメ谷ト俗ニ云奥ニ又葦谷ト云所在リ依テアン浦ト云是等ハ利ヲ得ル所ナリ 笠石 言ハ築嶋前ノ続キニ茶釜ノ蓋ニ似タル黒キ石海中ニ在リ尤浮嶋ニ而明白ナリ神意ニ可故ニ笠石ト云ナリ 黒嶋 言ハ世ノ字名ニ皇土嶋ト云築嶋東ノ方続ク各嶋ナリ 亀嶋 言ハ神守様ノ神前神楽場ノ前下ニ亀甲能ク似タル石明白ナリ 附嶋 言ハ俗ニ築嶋ト云是ナリ神守様ノ真向沖ニ在リ則嶺ニ草木青々トシテ在ル 蘇嶋 言ハ乗越ト云俗ニ鷄声(ルビは服部ノ鼻ト云此所ニ離テ穴石在ル如モ其穴諷タニ(ン?)ニ似タル石ナリ是則蘇嶋ノ故ナリ 眞屋嶋 言ハ日御崎神社ノ広前下ニ岩屋在リ俗ニウノ穴ト云是則庵ニ似テ岩ヲ蓋ノ如ニウヲフ故ニ眞屋ト云ナリ老人ハ能ク知所ナリ 松嶋 言ハ俗説箱嶋ト云則箱ノ如クニシテ雨露凌ク故ニ箱ト云全クハ山嶺ニ松敷(敷) 千年ヲ経テ造木ノ如ク神意ニ可ヲ以松嶋ト云飛渡潮ニ依自由也 立石 言ハ西浜ニ立石在テ敷(敷) 千年ヲ経テ敷(敷) 穴在リ勿論大穴ノ分ニハ神弊ヲ請ジテ恵比須神祭ルナリ 外ニ神守岩 言ハ神前西側ニ大岩ノ□立烏惶(帽)子ノ如ニシテ裏ノ嶺松ノ老木在然モ松ハ岩平ク附キ至テ小木ナリ 烏帽子石 言ハ神前東方ニ下兩三石ノ下布ヲシテ其上ニ烏帽子ノ如キノ石在リ座石上ニ在テ氣高シ神意ニ可故ニ烏帽子ト云是也 平瀬 言ハ烏帽子岩ノ東二十五六枚布キノ平キ黒キ嶋在リ潮ノ差引ニ依テ烏帽子石モ同様ニ海中ニ浮クナリ常ニ白砂ニ二ツ共腰二分通りハ砂中ニ在リ

八

「蘇嶋」の考察を終え、本章では「稲積嶋」(第一章引用文4行目)を取り上げる。この島の属する「稲上浜」は「須義浜」の次(西)に記されている。「須義浜」は今の菅浦(地図(一)A・(5)K)が遺称地である。従って、「稲上浜」は菅浦の西の稲積の浜(地図(1)G)に当たるとは諸注の通りであろう。⁽¹⁾

しかし、「稲積嶋」がどの島に当たるかは説が分かれている。加藤氏の『参究』は「稲積湾口に東西に並ぶ二つの小島」⁽²⁾とする。加藤氏

は島の名を書いておられないが、現地ではマジマ⁽³⁾と呼んでいる(地図(1)H・(4)FG、写真(6)HIJ)。秋本氏の古典大系本注では「稲積の西方、北浦の岬、奈倉鼻(地図(1)I・(4)H、写真(5)E・(2)……服部)の一部が島になっていたのであろうか。」とする。

次に、「稲積嶋」の次(西)の「大嶋」の比定についても諸説は分かれている。『出雲風土記抄』(桑原文庫本)は稲積の麻仁祖山(高さ一七二メートル。地図(1)F・(4)B、写真(5)D)とする⁽⁵⁾。『参究』はこれでは大きすぎるとして右の奈倉鼻⁽⁹⁾に当て、秋本氏古典大系本は「奈倉鼻附近の岩礁であるが、いづれか不明」とする。

最初に、この二島を比定する手がかりとして、島根半島沿岸部で実際に見た四十六例の島から帰納される、風土記の島の記載における三つの傾向について述べたい(第三章で記したところと重複する点もある)。即ち、

一 島の周囲と高さを記しているものは、記していない島よりも周囲が大きく高さも高い。もしくは、そのように見える。

二 植物記載のある島は、記載のない島よりも周囲も大きく高さも高い。もしくは、そのように見える。そして、実際に今も植物が豊富に生育している。これに対し、植物記載のない島は現在でも植物が全くないか、生えていても僅かである。

三 「生^ニ紫菜、海藻」の注のある島は、現在でもノリや海藻類が豊富に生えている。これに対し、ただ「磯」とのみ記している島は、それらがほとんど生えていないか、もしくは生えていてもごく僅かである。

この三つの傾向を手がかりとして諸説を検討すると、まず、「大嶋」は島の大きさに関する記述がないので、五〇〇メートル近くも地続きの大きな麻仁祖山に当てるのは妥当ではない。また、北浦の奈倉鼻とするのも、この岬は高さも高いし周囲も相当あるから適当でない。写真(2)の如く、岬には今も種々の樹木が沢山繁っており、植物記載のない「大嶋」に比定することはできない。

そこで、右述の稲積の小島ではないかと思ひ、菅浦在住の山根紀郎氏のご紹介により、稲積の中島松義氏(大正三年生)を訪問した(昭和五十九年十月二十八日調査。以下特に断らない限り同日の調査による)。中島氏によれば、この島はマジマと呼ばれている。『参究』は「二つの小島」とし、現在の国土地理院発行の二万五千分の一地図(地図(1))も二島に描いているが、現地を見ると図(2)の如く三島から成っていた。植物は今も全く生えていない。美保関町大字笠浦在住の船越亮氏によれば、ノリは沖合の荒い波をかぶり且つ天日にも晒される島や岩礁に生えるもので、湾内の島にはほとんど生育しないという(昭和五十九年九月二十三日調査)。稲積のマジマも湾内にある岩礁であつて、中島氏はノリは生えない、と言われる。以上の点から、「磯」とのみある「大嶋」はマジマに比定すべきだと思ふ。

次に、「稲積嶋」については、周囲と高さを記しているので、周囲が目立つ大きな島でなければならぬ。そのような島は附近では北浦の奈倉鼻しかない。注(4)にも記したように『出雲風土記抄』成立の天和三年頃には独立した島であつたが、現在では写真(5)Bの如く砂嘴で繋がっている。

「稲積嶋」には「有^ニ松木、鳥之栖」の注記がある。「松木」は『出雲風土記』の島の条の中では異例の表記であつて、解本・訂正本の「松林」の方が良いかも知れない(『参究』は「松林」、古典大系本は「松木」とする)。奈倉鼻はこの附近の島の中では最も樹木が豊富であり、松も繁っているし(写真(2))、蔦やカラス、カモメの類がこの岬の木々に止まっているのが見えるので、今も鳥の巢はあると思う。以上から、「稲積嶋」は奈倉鼻とするのが妥当と考えられる。なお、風土記時代には島であつたものが今では暗礁のような形になつて残っていないか、稲積と北浦において調査したけれども、そのようなものはなかった。

従つて、右の如く比定すると、風土記の両島の記載順序は乱れていることになるが、これに関しては後述することにして検討を先に進め

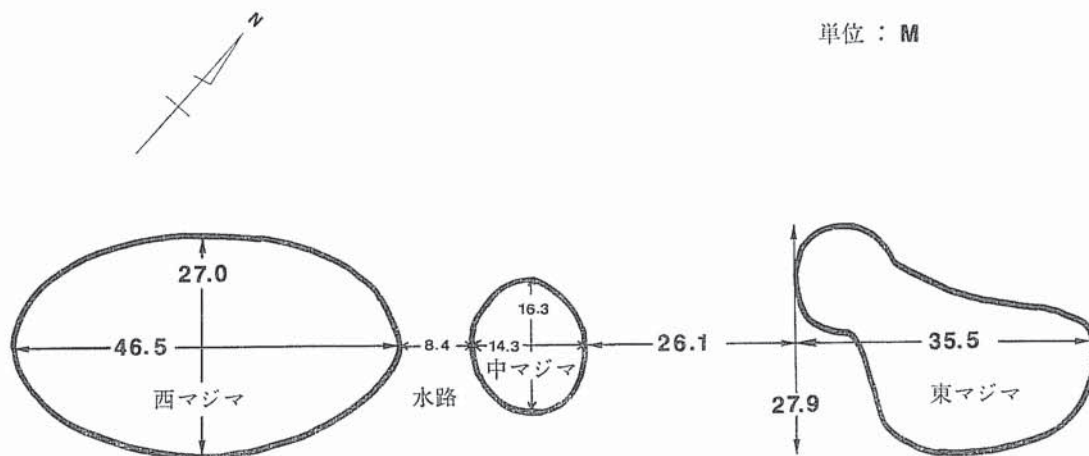
たい。

- 注(1) 「稲上浜」が北浦の浜(写真(A))であった可能性も考えねばならぬが、今は従来の稲積説に一応従う。稲積の氏神は伊奈阿氣神社で、北浦の氏神が伊奈頭美神社である(共に式内社)。稲積と北浦とはかつて一つの村であり、今日でもその遺制で稲積は大字北浦を称している。漁業や公共事業に於ても両者は行動を共にしている。神社の所在は必ずしも有力な根拠とはなし難いが、稲積の村の氏神が伊奈阿氣神社であることは「稲上浜」を比定する上での参考となるかも知れない。
- (2) 加藤義成氏第二章注(3)書三三六ページ。
- (3) 島根県立図書館蔵『島根郡村誌』(明治十四年編)には「馬島^{ウマジマ}」とある。本書の閲覧について島根県立図書館より特別なご配慮を賜ったことを記して感謝申し上げる。
- (4) 秋本吉郎氏第一章注(1)書一四五ページ。桑原文庫本『出雲風土記抄』は今の奈倉鼻に当てるが、同書に「稲倉大明神鎮座の島也」とあるように、『抄』成立の天和三年(一六八三)頃には独立した島であった。なお、『考証』は明確な意見を述べていない。
- (5) 島根大学図書館蔵本、八十丁オ。本書の閲覧をお許し下さった同図書館に記して感謝申し上げます。
- (6) 注(2)書二二六ページ。
- (7) 注(4)書一四七ページ。
- (8) 中島松義氏は、大正十二年の関東大震災の折に津波がこの砂嘴を越えたのを目撃した、と言われる。北浦在住の鈴木清氏(昭和十一年生)によれば、奈倉鼻の砂嘴の砂は、敗戦後この鼻の東に防波堤を作ってから常時溜まるようになったもので、それ以前は砂がつかたり消えたりしていた。台風や時化の時には砂が流れてなくなったが、やがていつの間にか溜まっていた。鈴木氏が子供の頃(昭和二十一年頃)満潮時に徒歩で渡れない時が確かにあったそうである。防波堤によって砂嘴が完全に地続きとなったから、昭和四十年頃、奈倉鼻の南裾にある伊奈頭美神社への参道を作った、という(昭和六十年八月十五日調査)。以上によって、奈倉鼻が近い時代まで島であったことが判明する。
- (9) 注(1)にも述べた通り神社の所在を証拠とすることは危険であるが、この奈倉鼻には式内の伊奈頭美神社が鎮座している。

九

「稲積嶋」の「中を繋ぎて」の問題をここで考察したい。この島が

図(二) 稲積湾マジマ実測図(昭和60年8月15日調査)



今の奈倉鼻とすると大きな疑問が生ずる。即ち、奈倉鼻は高さが二〇メートルから三〇メートルあり、大きさは海辺の岩場まで含めると南北二五〇メートル、東西一五〇メートルもある。鞍部が北西から東南に走っているが、ここも高さ一〇メートル、長さは一〇〇メートルもある。このように大きな島を古代に切り割ったり、穴を開けたりしたとは思われないし、実際に周囲を観察してみたが、そのような工事が施された痕跡と思われる所も認められなかった。

次に、マジマを昭和六十年八月十五日に中島松義氏と共に巻尺で実測したので、その結果を図(二)に示す。マジマは三つから成り、東から東マジマ(写真(9)H)、中マジマ(写真(9)I)、西マジマ(写真(9)J)の名が与えられている。島の大きさは、東マジマは東西三五・五メートル、南北二七・九メートル。中マジマは東西十四・三メートル、南北十六・三メートル。西マジマは東西四六・五メートル、南北二七メートルであった。高さは海面から一メートル位、高い所で一・五メートルほどである。島の上は凹凸があるが、大体において平坦である(実測した時刻は午前十一時頃。潮が満ちて来ており、干潮の時や冬期にはこの数値よりも若干大きくなると思われる)。三島は今では防波堤により繋がっている(写真(9)G)が、以前は各々独立していた。図(二)の如く、三島の間には透間が二つある。東マジマと中マジマの間が二六・一メートル、西マジマと中マジマの間(写真(9)矢印)が八・四メートルである。中島氏によれば、防波堤のできる前でも東マジマと中マジマの間の水深は浅く、大小の小岩が沢山海面に出ていたので小船でも通ることは不可能であった(写真(9)・(9)でも判るように、現在も岩が沢山見える)。これに対し、西マジマと中マジマの間の水路(写真(9)B・(9)B)の間は小型の伝馬船(写真(9)I)が余り、吃水二〇センチ)とサンバ船(写真(9)I)が長さ六・四メートル、吃水二〇センチ)だけが航行でき、この間で立網を張って漁をするだけの水深もあった。即ち、最も深い所で二メートル、最も浅い所で一メートルであった。

これが「中を鑿ちて」に当たる場所ではないかと直感したので、さらに詳しく中島氏にお尋ねした。特に、野井の二つ島の場合は築島へ耕作に通う便宜のためにあるので、この点に念を入れた。北浦は水田が乏しいが、稲積には人家の東方から南方に亘り、広い水田(地図(4)K)がある。この水田は今も多くは北浦の住民の所有となっている。北浦の人々が稲積へ耕作に来る時は西マジマと陸との間の水路(地図(4)G・I)を利用し、船を稲積の港に着けたり、さらには稲積川(地図(4)L)を溯上した。敗戦後この水路は防波堤ができて塞がれてしまったが、それまでは北浦からの小船は専らここを通過し、西マジマと中マジマの水路は不要な迂回となるので利用しなかったという。ただ、西マジマと陸の間も水深が浅いので、荒天時には西マジマと中マジマの水路と同じく航行できなかった。

中島氏の経験では、沖漁に出る時には専ら東マジマとその北の夫婦が鼻(地図(4)D、写真(9)A)の間の広い水路を通った。そして、港に帰る際には西マジマと中マジマの間を通るのが近道になるので、ここを通り抜けた。中島氏は沖からの帰りの場合しか思い出されなかったが、ここは北西の沖合へ出るのにも近道となった筈であるから、手漕ぎ船の時代には利用されたと推測される。また、沖漁だけではなく、湾内での磯漁(サザエやアワビのほか魚も捕える)にもこの水路を利用した、と中島氏は語った。

稲積港は北西風に対しては弱体であるが、北に大きな麻仁祖山を持ち、夫婦が鼻と古浦が鼻(地図(4)C、写真(9)F(9)B)が西に出ているので、日本海沿岸で最も厳しい冬の東北風に対して強く、また北風にも強い港であった(隣の北浦の村は総ての風に弱体である)。この稲積の港の真正面(北西)に三つのマジマが横たわっているため、北西風の波に対する天然の防波堤となった。マジマの水路があったことから、かつての稲積港は三方の出入りが可能となり、防波堤で西と北西を塞がれてしまった現在よりもはるかに便利であったという。

以上から、「稲積嶋」の「中を鑿ちて」はマジマに関するものであ

ることが明らかとなった。述べたように、マジマの水路は小型の櫓船のみ航行でき、しかも波の荒れた時には通れなかった。この水路の巾は八・四メートルであるが、実際に船の通過できる所はさらに狭ましく巾三メートル程で、残りは浅瀬であった。従って、この狭まい部分が風土記時代の工事の跡ではないかと推察される。マジマの岩石の質は軟らかく、現在でも黄褐色に全体が風化している。風土記の工事は二島が(かろうじて?)繋がっていたのを切り通し、掘り深めたものと思われる。写真(9)(10)の白の矢印の箇所は人工の跡を感じさせる。

これで「稲積嶋」の検討を終えるが、このように考察すると、風土記の本文に乱れがあることになる。即ち、諸本は「松木」・「松林」を除き一致しているけれども、「中を鑿ちて」以下は、「大嶋」(前章参照。今のマジマに当たる)の下にあるべきである。

注(1) 島根町大字加賀の海岸で見た伝馬船(写真(7))は、長さ四・三メートル、最大巾一・二七メートル・高さ五・二センチ(吃水二〇センチ)であった。

(2) 島根町大字野波の海岸で見たサンバ船(写真(8))は、長さ六・四メートル、最大巾一・五メートル、高さ五〇センチ(吃水二〇センチ)であった。

(3) 島根半島の北岸においては冬の猛烈な東北風に対して強い港は少ない。松江に近いことからであろうか、江戸時代稲積には隠岐への港があった。即ち、日置風水『隠岐のすさび』(板本、刊年なし、井筒屋庄兵衛板、島根県立図書館蔵本)によれば、著者は松江より船で手角(現在の松江市手角町)着き、手角から徒歩で北浦に至り舟宿で休んでから夜中乗船している(一ウ、二オ)。同書には隠岐産の牛がこの港にもたらされている、とある。中島松義氏宅は屋号を「隠岐屋」と名告るが、これは隠岐への港の舟宿を江戸時代に営んでいたことによる。「隠岐屋」の旧宅は北風や東北風から守られている地図(4)Eの場所であったが、嘉永七年(中島家の伝える幼児の犠牲者の位碑により正確な年が知られる)の山崩れで埋まってしまった。中島氏は大正十年頃まで、「隠岐屋」旧宅前の浜に隠岐からの牛を上げる(海に突き落として泳がせる)を目撃されたそうである。

ちなみに、麻仁祖山の北部(地図(1)E・(4)A、写真(5)G)に「巻が鼻」の地名があるが、これは「牧が鼻」の意で、隠岐からの牛を一旦ここで

放牧したことによる地名と考える。地元では往古在地の富豪が利用するための馬を飼ったことによる地名であると言っている、と笠浦在住の船越亮氏より伺ったが、私は『隠岐のすさび』に隠岐からの牛をここで飼う、と記しているの右の如く考える。

附 説 「大嶋」の比定の問題

まだ次のような問題が残っている。即ち、「中を鑿ちて云々」の一文を右の如く「大嶋」に属さしめても、まだ島の順序が前後しているからである。正しくは、「大嶋」(マジマ)の次に「稲積嶋」(奈倉鼻)が来るべきである。

一体に大島という島は全国的に非常に数が多く、その規模もまちまちである。ほんの小さな小島を大島と呼ぶ例は沢山ある。これは、自分達の日常生活している範囲内において目前に大きく見えれば、その相対的な大きさは問題とならないからである。例えば、地図(1)K・(3)Aは陸地と繋がっている(時化の時に陸地との間を波が越す)ただの岩礁であるが、これを領する大字千酌では大島と呼んでいる。島根町沖泊でも港近くのほんの小さな岩礁を「大島」と呼んでいる。このような理由で、私は初めのうちはマジマを「大嶋」と呼んでもさしつかえはない、と考えていた。

しかし、このマジマのすぐ西隣りに奈倉鼻があり、写真(9)・(10)の如く稲積の海岸から大きく見えること、写真(9)Eの如くこの附近では最も大きな島であることから、「大嶋」はマジマよりも奈倉鼻の方が可能性が高いと考えるようになった。こう考えると、風土記の本文はさらに錯雑していることになり、正しくは、

稲積嶋中鑿南北船猶來也

大嶋 周四十八歩高六丈有松林一本

とあるべきことになる。

注(1) 大字千酌在住松本茂富氏(大正十一年生)ご教示。松本氏と共に実

測したところ、東西五九メートル、南北三七メートルであった（昭和六十年八月十六日）。

(2) 第四章注(3)書三四ページ地図。但し、同誌編纂委員会蔵本には沖泊在任の小川孝吉氏申し出による訂正が書き込まれており、それによると、この「大島」を港に面した種子島の小さな岩礁とするのは誤りで、港の北部にある磯の名称であるとする。蔵本を閲覧させて下さった編纂委員会に感謝申し上げます。

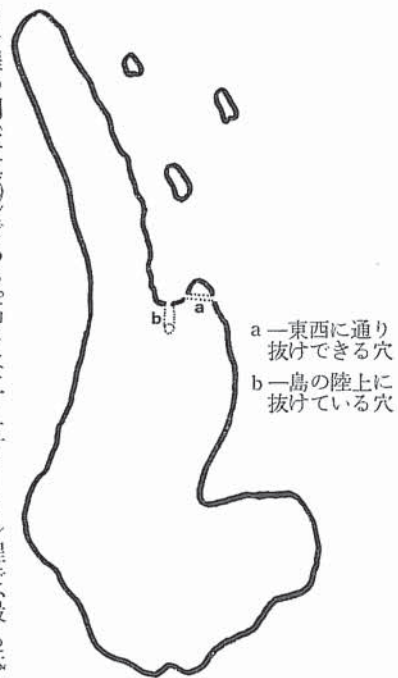
(3) 中島松義氏によれば、麻仁祖山の南にある伊奈阿神社で奏上する祝詞の中で麻仁祖山を大島と称している、とのことである。この考え方は『出雲風土記抄』に見られる（第八章）が、やはり後人によるものであるろう。地図や写真でも判るように麻仁祖山南麓は東西五〇〇メートルも地続きであった、風土記の時代にここが切れて一箇の島であったとは考えられない。

十一

最後に「衣嶋」を取り上げる。『参究』は「菅浦湾にある鞍島（地図(1)C・(5)DE、写真(5)AE……服部）であろう。」⁽¹⁾とし、古典文学大系本は「菅浦湾の木島（地図(1)B・(5)B、写真(4)A……服部）」と比定する。第八章で述べた「三つの傾向」によって考えると、周囲と高さを記しているからこれは目立った島でなければならぬ。木島の周囲は鞍島よりはるかに大きく、高さも高い（調査時には波があり実測できなかったが、目測では一〇メートル以上に感ずる所もある）。鞍島の方は高い所でも水面から四メートル程である。

この問題に関しては、菅浦在任の山根紀郎氏よりご紹介頂いた井川正善氏（明治三十九年生。漁業）にお尋ねしたので、以下に述べる（井川氏より昭和五十九年十月四日・十六日・三十日、昭和六十年八月十九日・二十二日、九月二十七日に伺ったところを総合して記す）。まず、「中を繋いで」に当たるような島がないかどうかお尋ねすると、井川氏は木島が該当するであろう、と言われた。木島には図(三)aの如く東西に貫通した穴があるからである。井川氏にご案内頂くと、この穴は西の口が巾一・五メートル程、東の口も巾一・五メートル程で、長さは七、八メートルであった。洞窟になっているのはその中の五

図(三)菅浦湾木島の「穴さん」



メートル程の間（写真(2)）である。高さは二・五メートル程で、最も低い所で二メートル位である。水深は三メートル程という。木島にはもう一つ、この穴の西の入口付近から南の方向に貫通している穴がある（図(三)b）。この二つの穴を総称して「木島の穴さん」と呼んでいる。写真(2)はこの二つの穴の入口を北方の地図(5)c地点から見たものである。矢印附近には写真では判らないが、東西に抜けている穴の西の入口がある。井川氏にこの穴を船が潜り抜けることによって何か利便はないか機会ごとにお尋ねしたが、井川氏はいつも「全くない」と答えられた。井川氏によれば、この穴は天然のもので、巾一・五メートルのサンパ船では通り抜けはぎりぎり、舷側が当たるし、より小さな伝馬船（巾一・三メートル。今では木造のサンパ船・伝馬船の数は極めて少なくなった）でも、あちらこちらを当てながらようやく潜り抜けることができるような場所であるから、漁撈にも港との往還にも利用できない。井川氏は、ただ海水浴客を喜ばせるために潜って見せたことがあるだけで、「あんな所は遊覧で通り抜けただけで、海の仕事を通る場所ではなかった。」と強調された。もう一つのbの穴は写真(2)に見える北の入口から中へ五、六メートル入った地点から陸上へ四、五メートルの長さで貫通しているものであるから、航行の便とはならない。木島にはこの「穴さん」以外に穴や水路はないし、これらの穴も写真で

も判るように人工のものではない。

以上から、「衣嶋」を木島に比定すると、「中を鑿ちて」の説明が
できなくなる。

注(1) 加藤氏第二章注(3)書三五ページ。

(2) 秋本氏第一章注(1)書一四五ページ。

(3) この穴は昭和五十九年十月十六日と昭和六十年八月二十二日に調査したが、外海にあるためうねりが強く、実測することができなかった。六月末から七月にかけての数少ない「べた風」の時以外は船を静止させることができない。このような所で島を貫通させるような大工事を行なつたとはとても考えられない。

(4) 井川正善氏は船外機船に代えてからは、船の巾がサンバ船よりも僅かに広くなったため、潜り抜けができなくなった、と言われる。

十二

こうして木島の可能性がなくなったので、次に加藤義成氏の鞍島説はいかがであろうか。地図(1)・(5)でも判るように、鞍島には野井の二つ島と稲積のマジマにあるような、南北に抜けた水路がある。

井川正善氏は、鞍島の水路を交通のために利用した経験はない、と当初は答えられた。船による耕作については、菅浦の湾の西の字穴深(地図(5)I)に菅浦の田畑があつたので、船で耕作に出かけた時代にはカグ島(地図(5)G)と手沓の鼻(地図(5)H)の間(防波堤で今は地続きとなる)を東西に抜けた。ここは一つの島を開鑿したような地形ではない。荷が重くなり吃水が下つた時には、カグ島とその北にあるタカチツセ(地図(5)E)との間を通して帰った。このEGの間を「コギドー」と呼んでいる。

鞍島は地図(5)の如く二つに分かれており、二つを総称して鞍島と呼んでいるが、区別する時には東の大きい方(D)を鞍島、西の小さい方(E)をタカチツセと呼んでいる(写真(5)A E)。字穴深から帰る時にこの鞍島の水路を通るのは全く不要な迂回となる、と井川氏は言

われる。

沖漁については北と北東の海の往来には木島と鞍島の間を通った。北西の海の往来には右のコギドーを利用した。コギドーは南北の巾が八〇メートル程であるが、タカチツセとカグ島の近くは瀬になっているので、実際に通れたのは巾三〇メートル程度であつた。この水路は十分な広さがあり、二丁櫓の船も楽に通れた。コギドーは今では防波堤で埋められているが、二十年程前までは北西の海の出入りに盛んに利用した。井川氏はコギドーは「漕ぎ通り」の訛りであつて、ここが主要水路であつたことを物語るものである、と言われる。このコギドーももちろん一つの島を開鑿したような地勢ではない。

鞍島の水路は、地図ではやや判りにくいが中央で湾曲している(写真(5)C・(6)B)。そのため、手漕ぎ船では通り抜けに手間がかかって近道にはならなかつた。やはり、コギドーを利用するのが早かつたという。鞍島の水路は北の口で巾九メートル程(目測)である。今は水路の中がテトラポットで埋められている(写真(5)・(6))が、井川氏の記憶では最も狭まい所で巾五メートルであつたという。このように曲つた水路では、風が吹くと櫓による操船が難しくなるし、とりわけ波が立つと中央部で水が盛り上るので非常に危険となる。ここは波が立つた時には近づいてはならない危険地帯という。以上のような理由から、「コギドー」という便利な水路があるのにわざわざ鞍島を交通の便のために開鑿する必要はなかつたと思う。」と井川氏は力説された。しかしながら、菅浦には風土記時代に島だつたような暗礁もないので、木島と鞍島以外には「衣嶋」に該当する島がない。何度もお尋ねするうちに、井川氏は鞍島の水路を航行したことを思い出して下さつた。即ち、ここは港の出入りのためではなく、専ら磯漁の間に利用した所だつたそうである。鞍島から木島周辺にかけては、サザエ、ナマコ、ウニ、ワカメ、テングサなどの海産物が豊富に取れたので、箱眼鏡を覗きながら鞍島の水路を抜けて島の表側や裏側に回つた。鞍島の水路の中にもワカメやテングサが生えたので、ここを通り抜けながら

採取した。現在は鞍島の北側では磯漁を続けているけれども、南側は防波堤で砂が溜まり、サザエも海藻も取れなくなったため、磯漁はしていない。

注(1) 山根紀郎氏(明治三十三年生)によれば、字穴深には明治から昭和初期までに田が一町、畑が三反ほどあったという(昭和五十九年十月四日調査)。

十三

このことから、「衣嶋」は今の鞍島に当たるものと思われる。また、この場合の「中を鑿ちて」は、島の周辺での磯漁の便宜のために間を開鑿したものと推測される。それも、タカチヅセと鞍島(狭義の)が高くなり間が低くなっている地形を見ると、これまでの二例と同じく、一つの島を切り通したような大工事ではなく、水面の近くでかろうじて繋がついていた所を掘り下げたものと推測される。この水路の水深は最も深い所で三メートル、最も浅い所で一メートルであったというから、稲積島の場合と同じく開鑿を受けた可能性は十分にありうる。

しかし、まだ「衣嶋」の比定に関して問題が残っている。即ち、風土記が島の周囲と高さを記している点では、大きな木島の方がやはりふさわしい。また、解本は「衣嶋」を「コロモ(ジマ)」と訓んでいるが、古典大系本は「きぬ(ジマ)」と訓んでいる。後者の如く訓めば、木島はキヌジマの遺称という可能性も出てくる。

しかし、前述の如く木島の「穴さん」は天然のものであり、通り抜けが甚だ不便だし、港の出入りに利用したこともなければ磯漁に利用したこともないという。一方、「中を鑿ちて」は鞍島についての記述であることはほぼ確定的と思われる。

そこで、ここでも風土記の本文に乱れがあるのではないか、ということが考えられて来る。即ち、「衣嶋周一百廿歩高五丈」の次に鞍島に当たる島名を脱落させているものと推定されるのである。加藤氏の

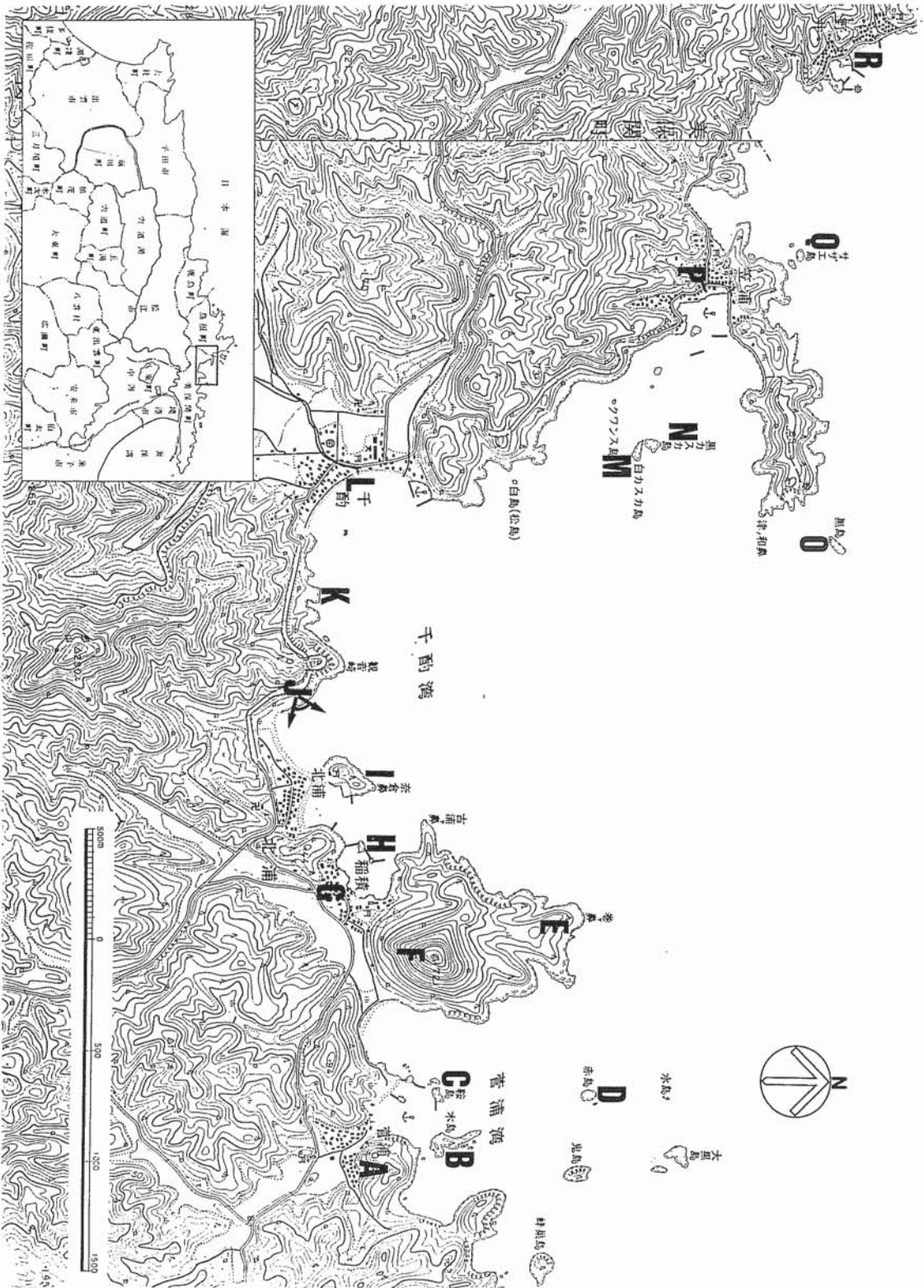
校本によれば脱落のあったことを示す徴証はない。しかし、万葉緯本や近代の諸校訂本が島ごとに改行しているのに対し、最古の細川本を初めとして、倉野本・日御碕神社本・抄本などの代表的な諸本が島の記載を続けて一行書きにしているのは、より脱落しやすい条件下にあったと言えよう。

*

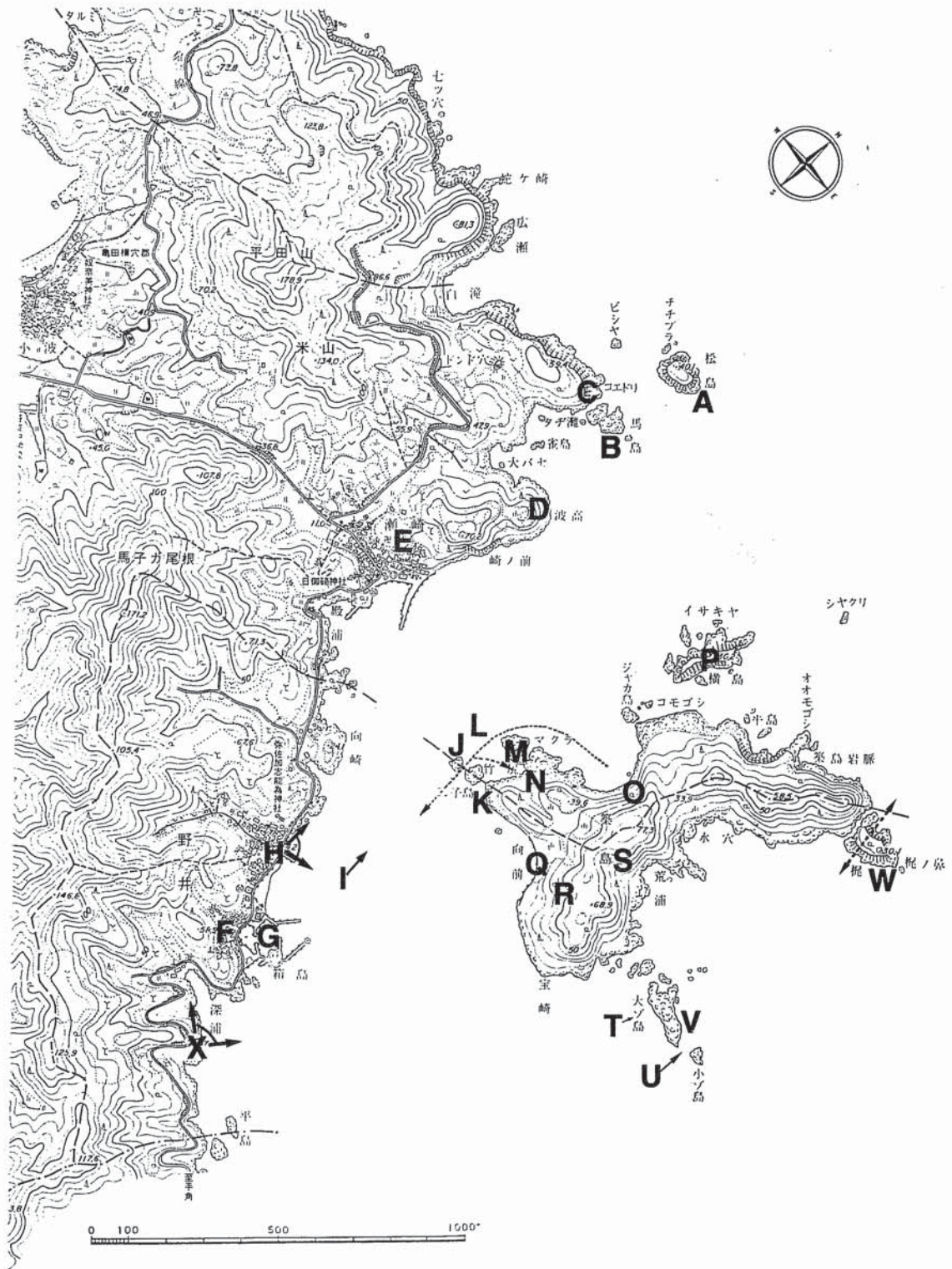
*

かように「蘇嶋」から「衣嶋」まで、現地調査をしながら検討を進めてくると、「中を鑿ちて」という工事を施した原因が海辺での生活と密接に関係していることが明らかになると共に、同じ「中を鑿ちて」でもそれぞれ土地の条件により機能に差のあることが知られた。こうして風土記時代の人々の生活が髣髴とすると共に、問題が本文にも及んで、現地調査が風土記の研究にいかん大切であるかを痛感させられた。(終り)

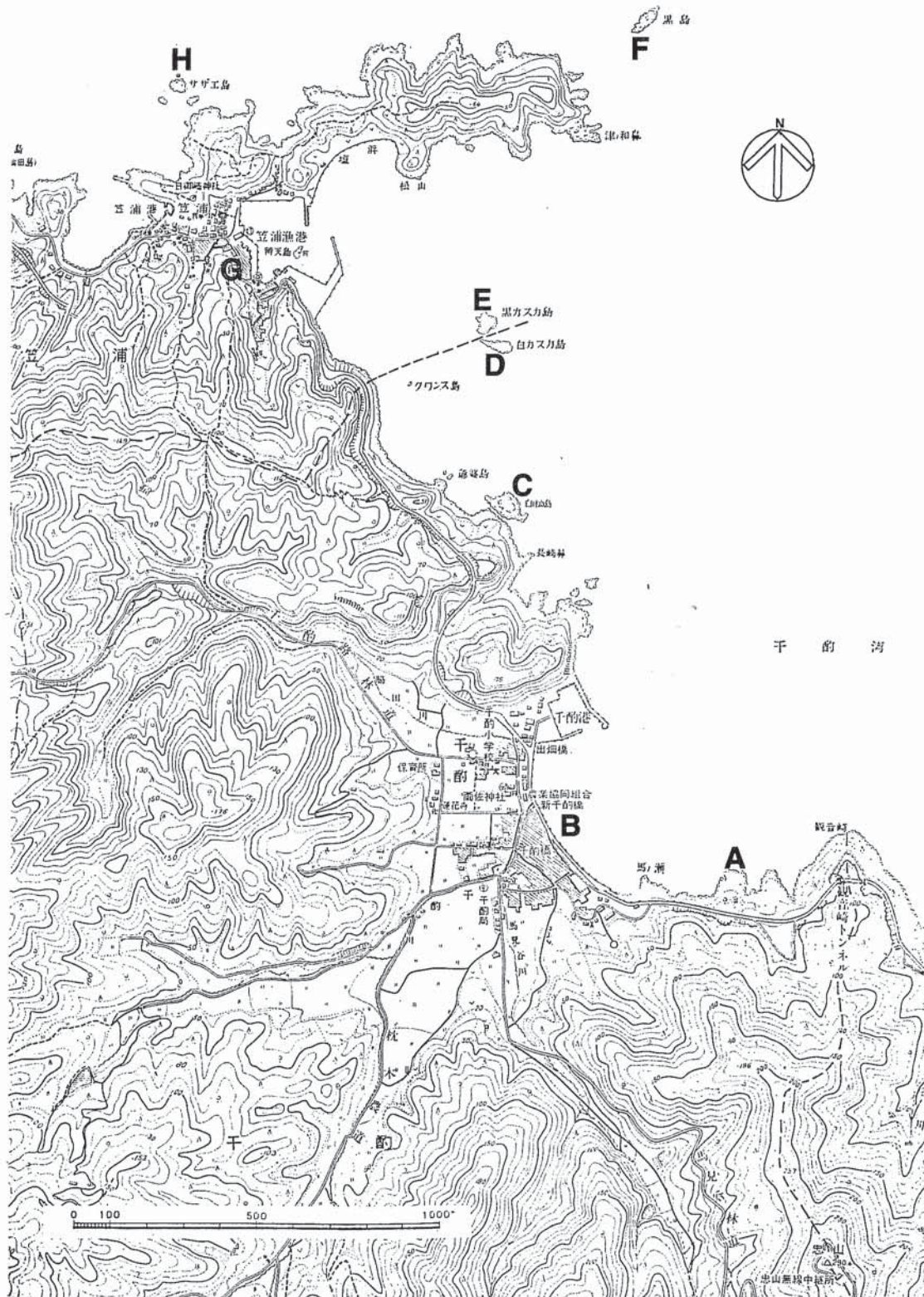
昭和六十年十一月三十日受理



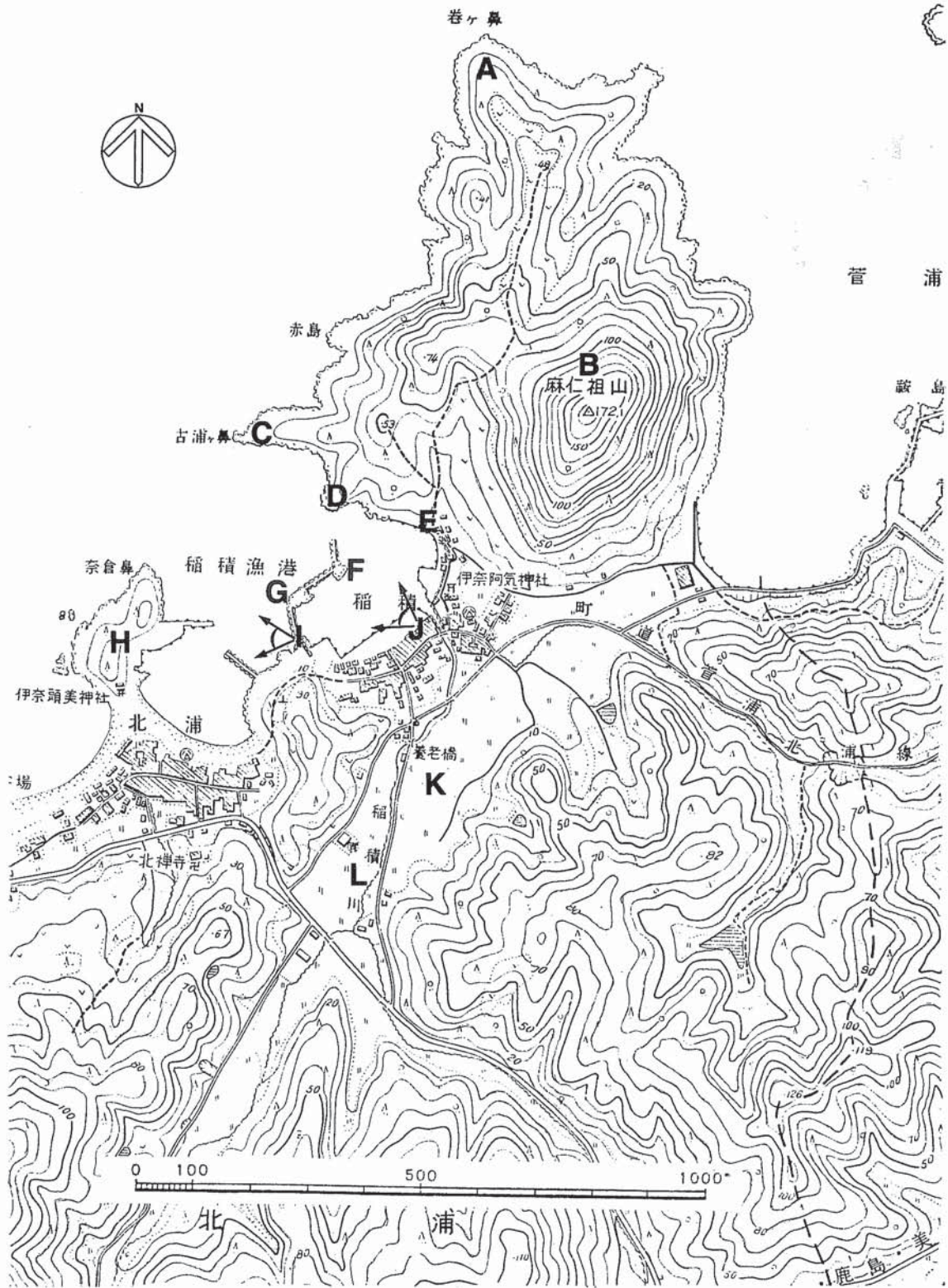
地図 (一) 国土地理院 25,000分の1「加賀」(昭和52年2月28日発行)・「鏡港」(昭和52年1月30日発行)による。



地図（二） 島根県八束郡島根町発行10,000分の1「島根町全図」（昭和49年8月撮影、昭和49年9月測図）による。



地図(三) 島根県八東郡美保関町発行10,000分の1「美保関町全図其ノ二」(昭和40年8月測図、昭和49年10月修正、昭和58年1月修正)による。

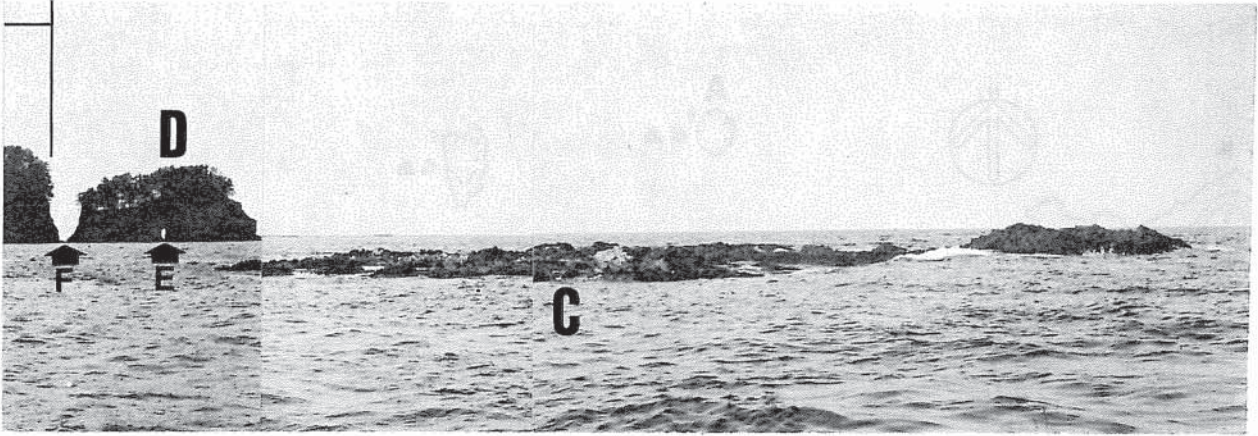


地図 (四) 原図は地図(白)と同じ。

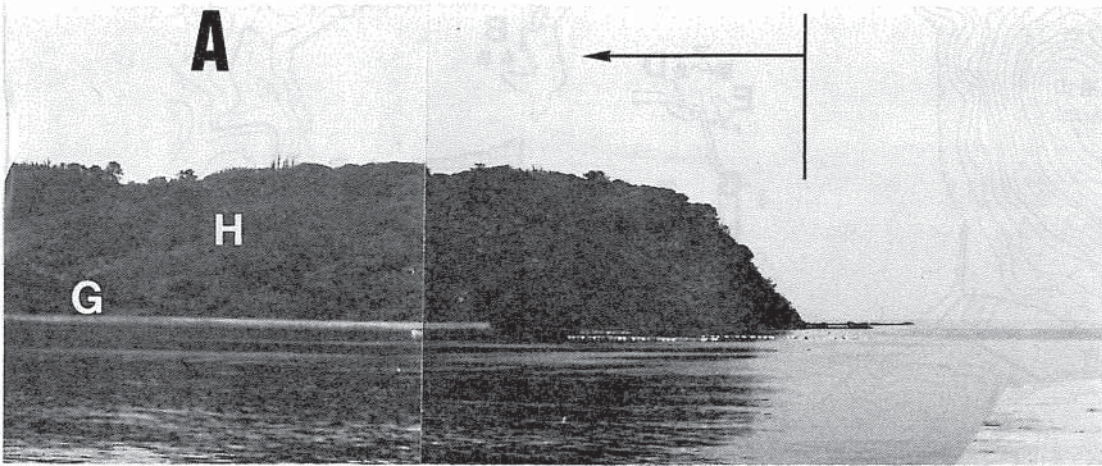
○ 小站



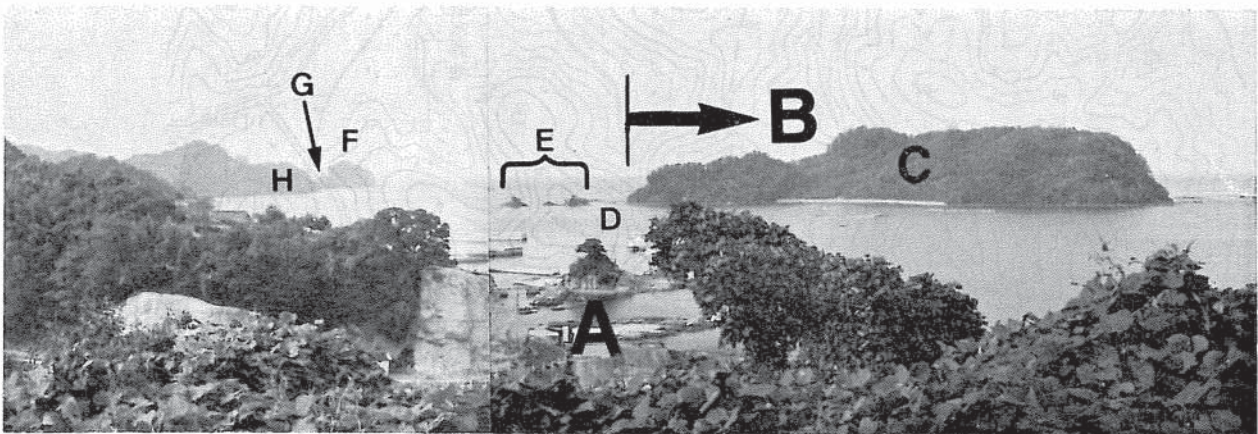
地図 (五) 原図は地図(白)と同じ。但し、鞍島の部分については原図が誤っているので服部が修正した。



B水路 C小ゾ島 D梶島 E通り抜けない洞窟 F築島と梶島間の岩場 G築島



C雀島 D二つ島の水路 E二子島 (CとEで「二つ島」と呼ぶ) F築島と二子島間の浅瀬 G地図(2)Qの向前



の箱島と野井漁港 B築島 (矢印の部分から右端まで) C築島南側の作物の良くできる斜面 D築島と二子島の岬 (「波高」) I段々畑の名残り (地図(2)Fの西)

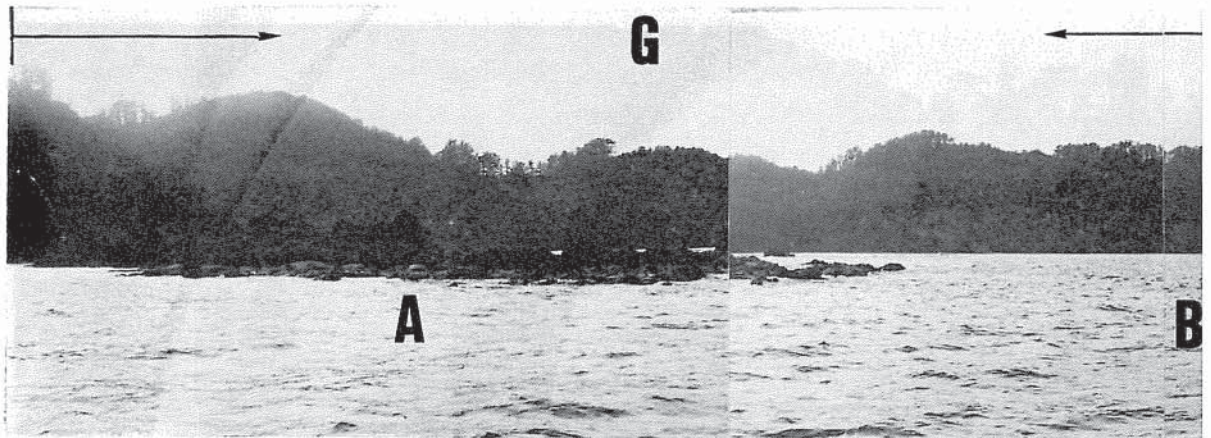


写真 (1) 大ゾ島・小ゾ島の水路を地図(2)U地点より望む(昭和60年8月29日。標準レンズ)。A大ゾ島

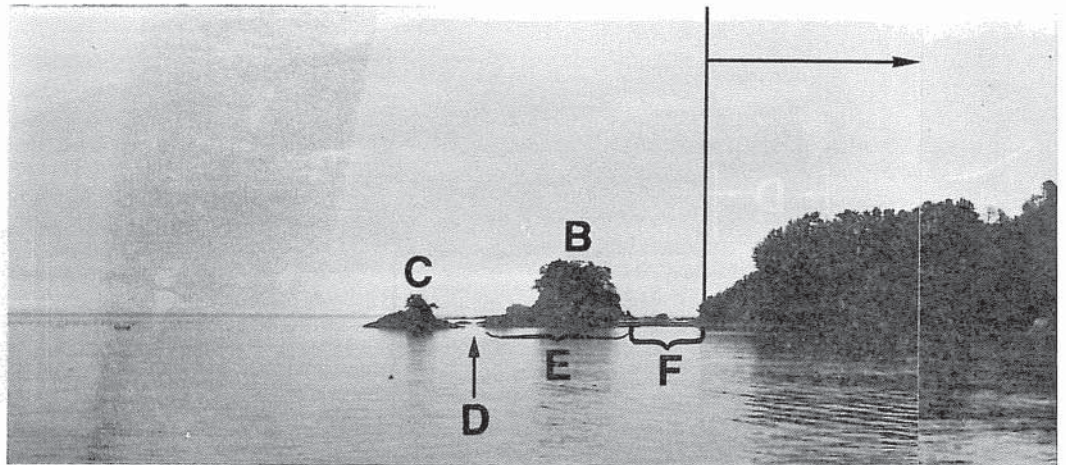


写真 (2) 築島を対岸の地図(2)H地点より望む(昭和60年8月16日。標準レンズ)。A築島 B横島
(みぎゃのまえ)の海岸 H地図(2)Rの築島南側の広い斜面

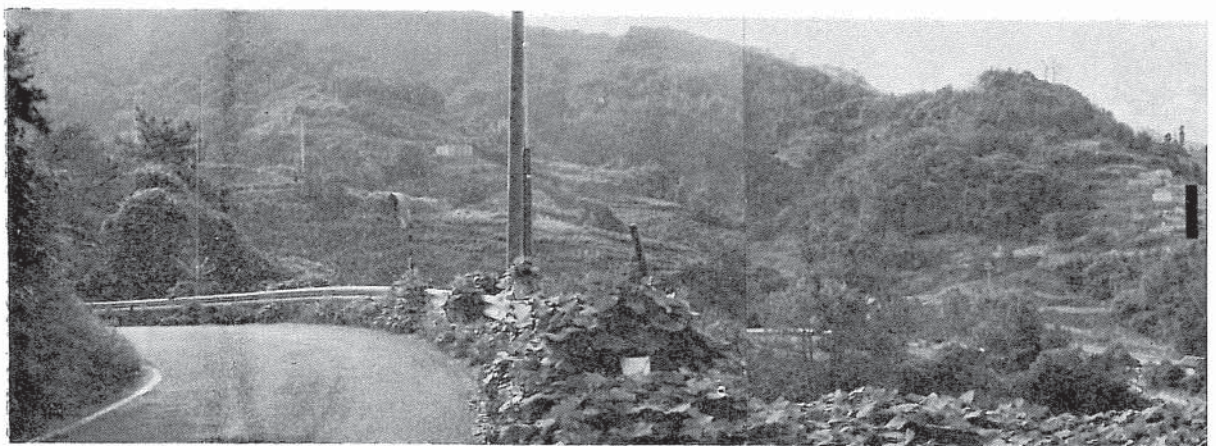
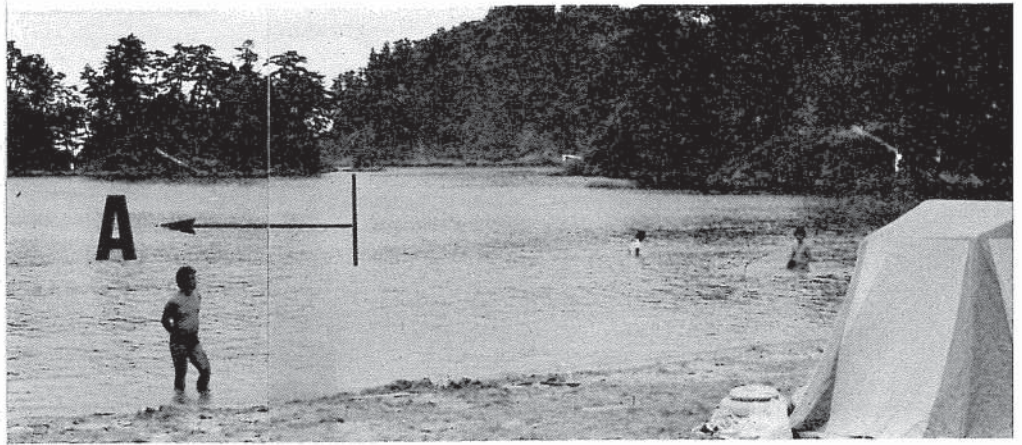
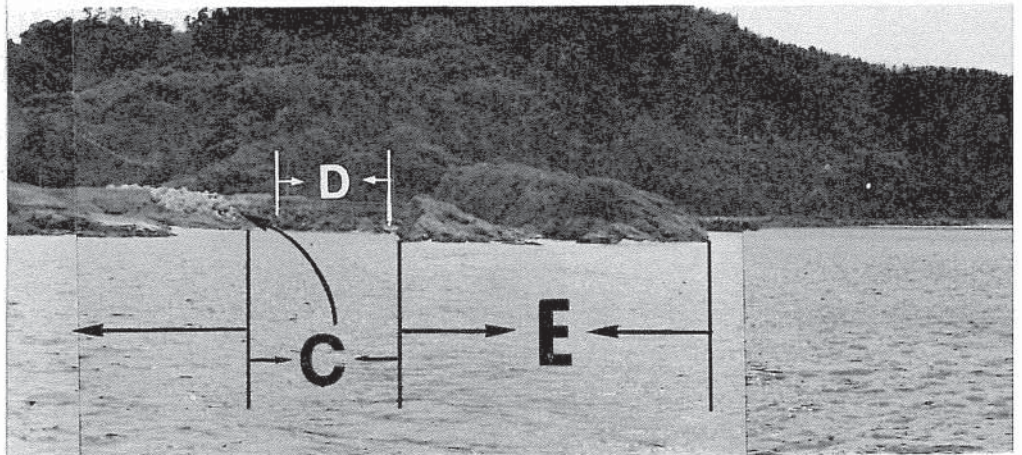


写真 (3) 野井・瀬崎・築島を地図(2)X地点より望む(昭和59年9月23日。標準レンズ)。A地図(2)G
間の航行できない浅瀬 E二つ島 F松島 G馬島(東半分が覗く) H地図(2)Dの瀬崎



D・(5)A) C狭義の鞍島(地図5)D) D鞍島西端の最も高い部分(防波堤越しに頭が覗いている。写真(5)参照)



10月16日。標準レンズ)。A狭義の鞍島 B狭義の鞍島西端の最も高い部分(写真(4)D) C水路(テトラポッド(6)C。地図1にも見える) Eタカチツセ(地図5)E) F菅浦の人家(地図5)K附近)



く。昭和60年8月22日。標準レンズ)。A狭義の鞍島 B水路(東南に向かって黒矢印の如く湾曲している)

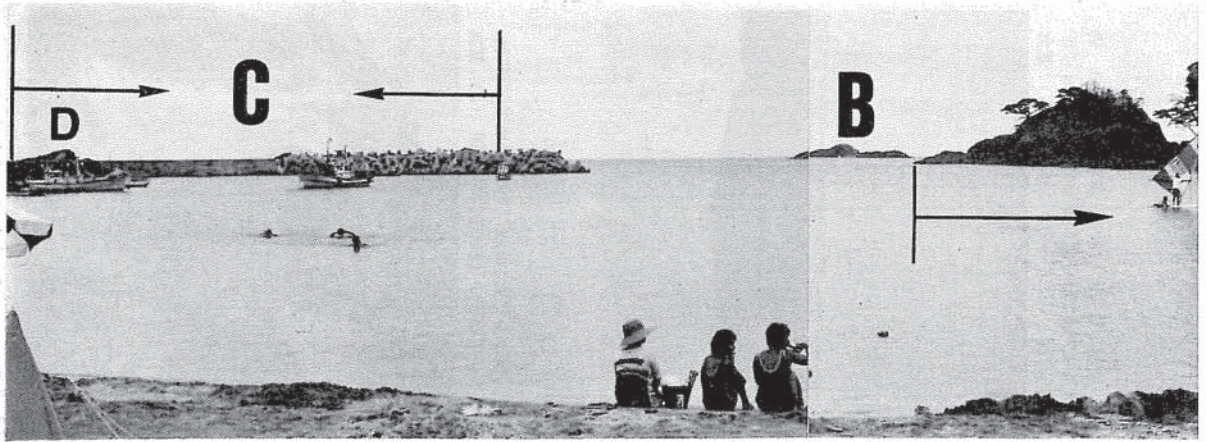


写真 (4) 菅浦の湾を地図(5)J地点より望む(昭和60年8月15日。標準レンズ)。A木島 B赤島(地図(1))

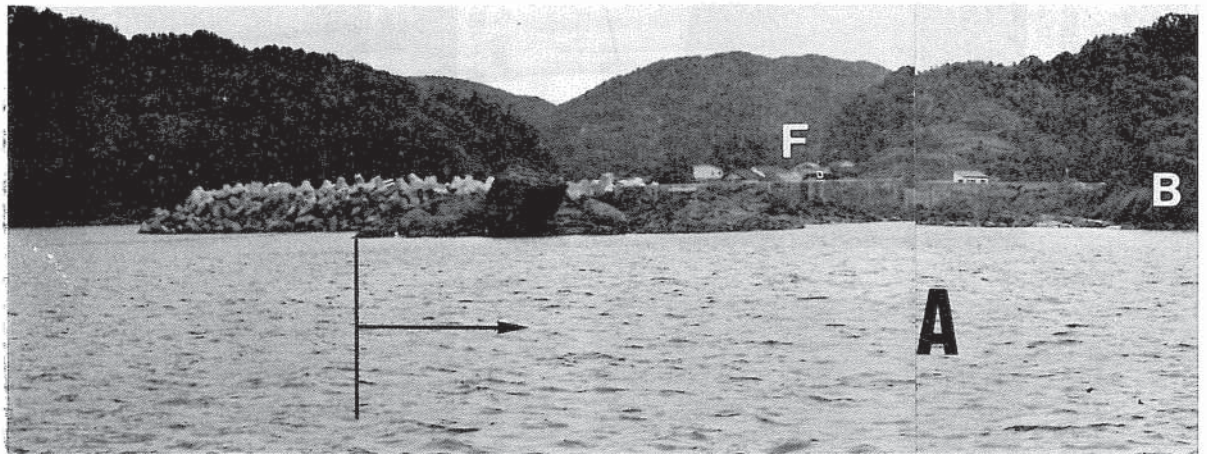


写真 (5) 鞍島(広義ではAとE。地図(1)C・(5)DE)の水路を北方、地図(5)ア地点より望む(昭和59年7月。写真(5)Aで埋められているが、矢印の如く湾曲している) D地図(5)Fの岩、「コギドーの瀬」(写真(5)D、地図(5)F)

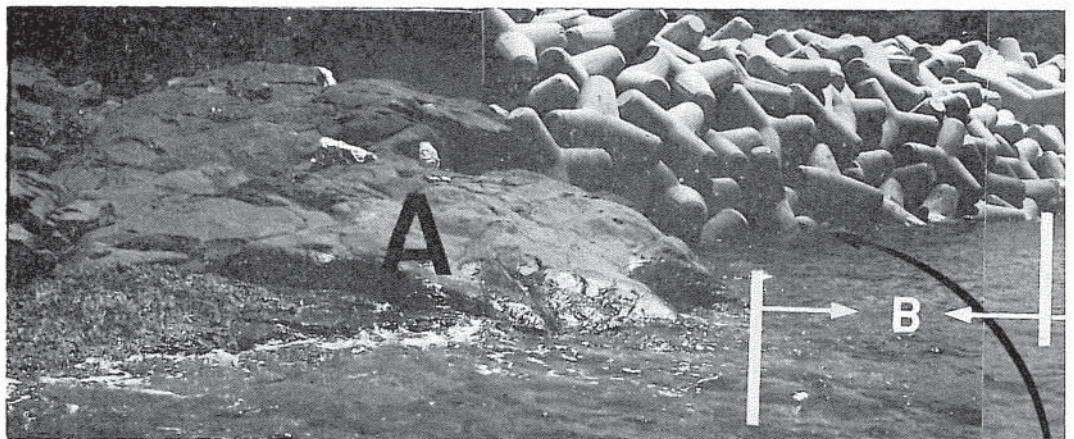


写真 (6) 鞍島(広義)の水路の中央附近から南方を望む(Cの左上に人物がいるので水路の幅の推測がつかない) Cコギドーの瀬(写真(5)D、地図(5)F) Dコギドー Eカグ島(地図(5)G) Fタカチヅセ

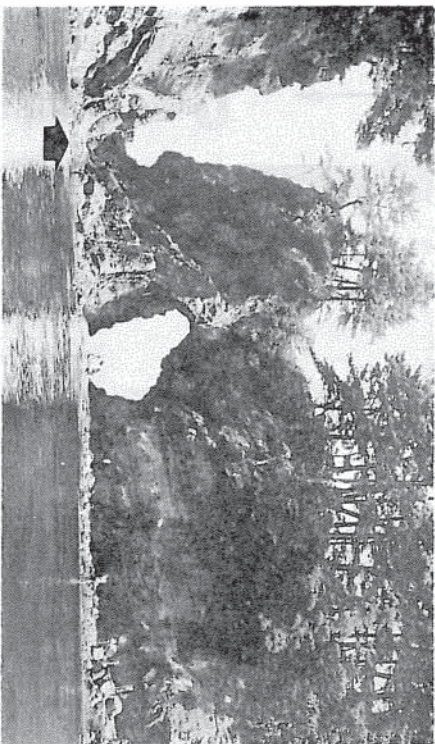


写真 (7) 梶島 (地図②W) の通り抜けのできる洞窟を南から望む (昭和59年8月12日。標準レンズ)。矢印は築島 (左端) と繋がっている岩場。

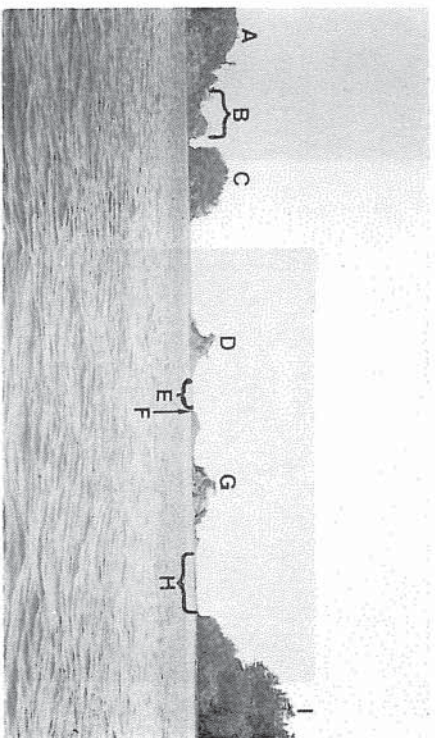


写真 (8) 二つ島を地図②I地点より望む (昭和60年8月9日。標準レンズ)。A瀬崎の岬 (地図②D「波高J」B馬島 (地図②)B。東の部分が見えている) C松島 D雀島 E二つ島の水路 F人工の跡と感じられない箇所 G二子島 H築島と二子島の間航行できない浅瀬 I築島

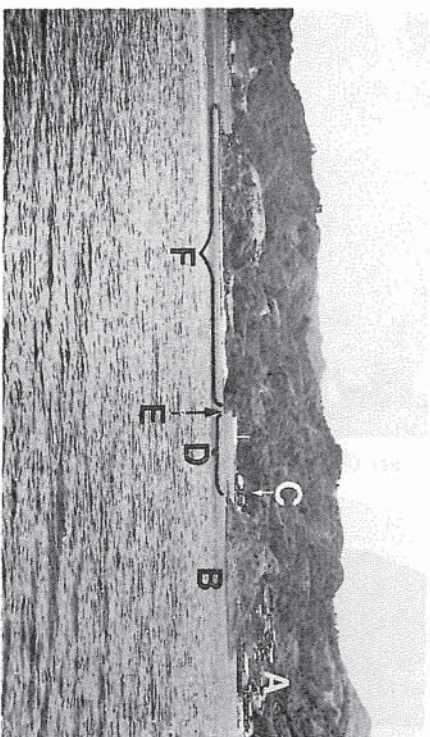


写真 (9) 二つ島の水路を北方より望む(昭和60年8月9日。標準レンズ)。A地図②Fの人家 B雀島 (雀の形に似ているという) C地図②Gの箱島と港 D水路 E人工の跡と感じられない箇所 F二子島

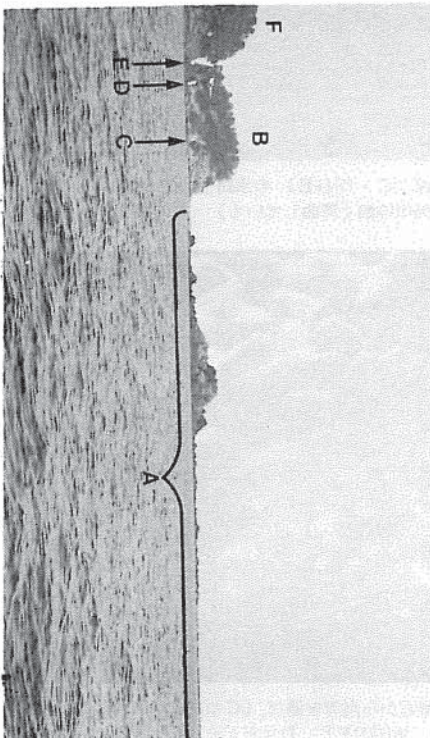


写真 (10) 大ノ島を地図②T地点より望む (昭和59年11月7日。標準レンズ)。A大ノ島 B梶島 C通り抜けのできない洞窟 D通り抜けのできる洞窟 E築島と梶島の間岩場 F築島

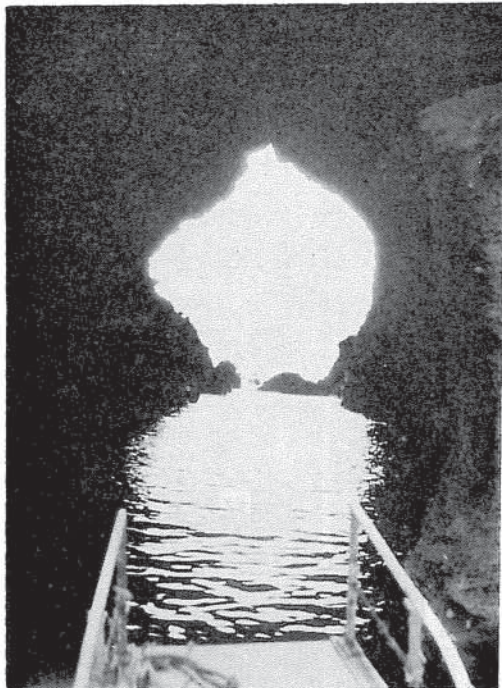


写真 (11) 梶島の通り抜ける洞窟(地図2)W点線矢印)に南から入る(昭和59年8月12日。標準レンズ)。

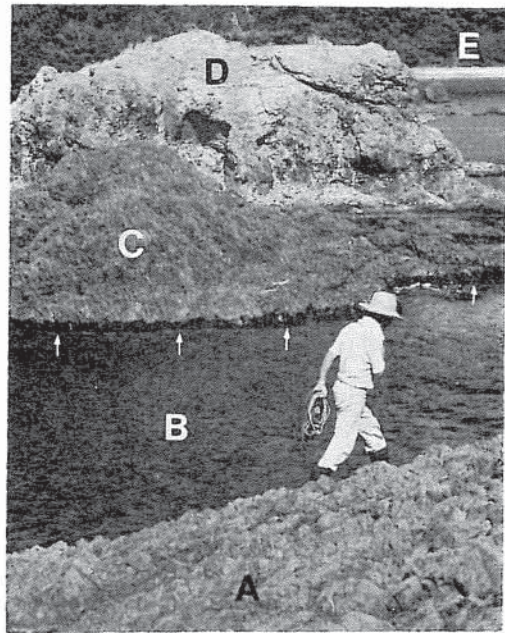


写真 (12) 雀島から二子島を見る(昭和60年8月11日。標準レンズ)。A雀島(岩肌に縦横に節理が走っている) B二子島の水路 C二子島の西側の低い部分(雀島よりも細かい節理が走っている) D二子島の東側の部分(岩の色が白味がかっている) E築島の向前三(みぎまのまえ)の海岸 矢印は人工の跡と感じられなくもない部分(写真8)F・(9)E)

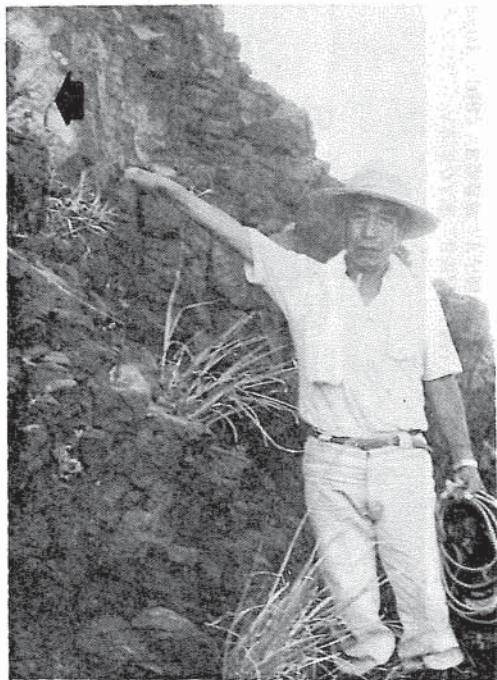


写真 (13) 雀島の岩肌(昭和60年8月11日。標準レンズ)。レンガを積み重ねたように縦横に節理が走っている。渡部弘美氏の示す矢印の白い部分は風化による剝落。二子島にはこのように風化で剝落した所が大ノ島よりも顕著に見られる。



写真 (14) 島根町野波のサンパ船。全長6.4m、最大幅1.5m、高さ50cm(昭和60年6月20日。標準レンズ)

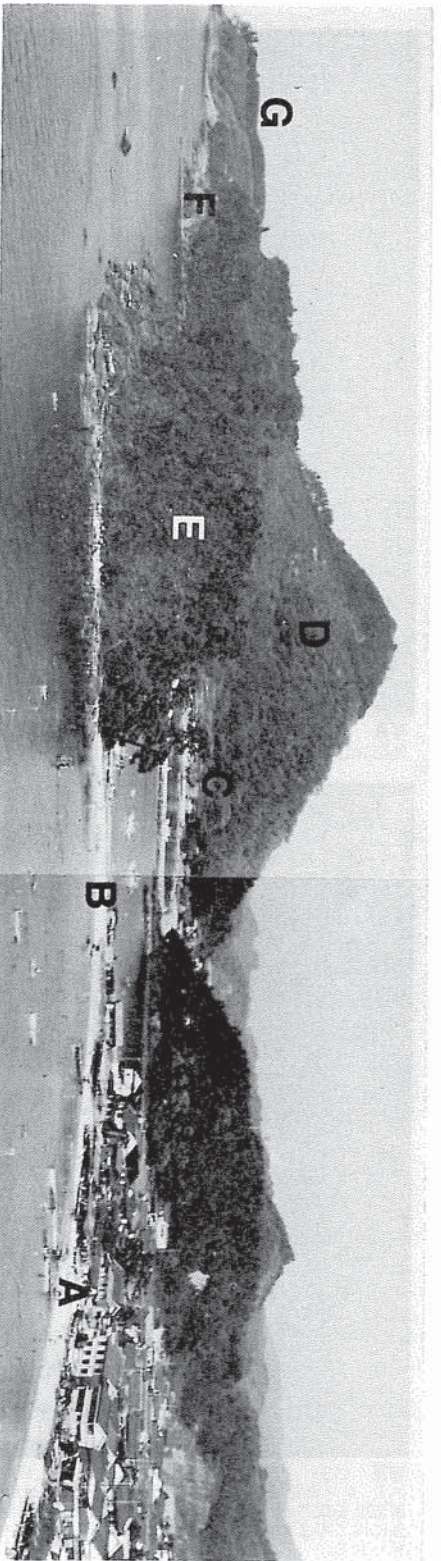


写真 (15) 美保岡町大字北浦と稲積を地図(1)J地点より望む(昭和59年7月26日。標準レンズ)。A北浦の人家 B奈倉鼻と陸とを繋ぐ砂嘴。Bの上に隣接しているのは北浦の港 C稲積の人家と港。記号C付近に隠岐への船宿「隠岐屋」があった。D麻仁祖山(地図(1)F・(4)B) E奈倉鼻 F古浦ガ鼻(地図(4)C) G巻ガ鼻(地図(1)E・(4)A)

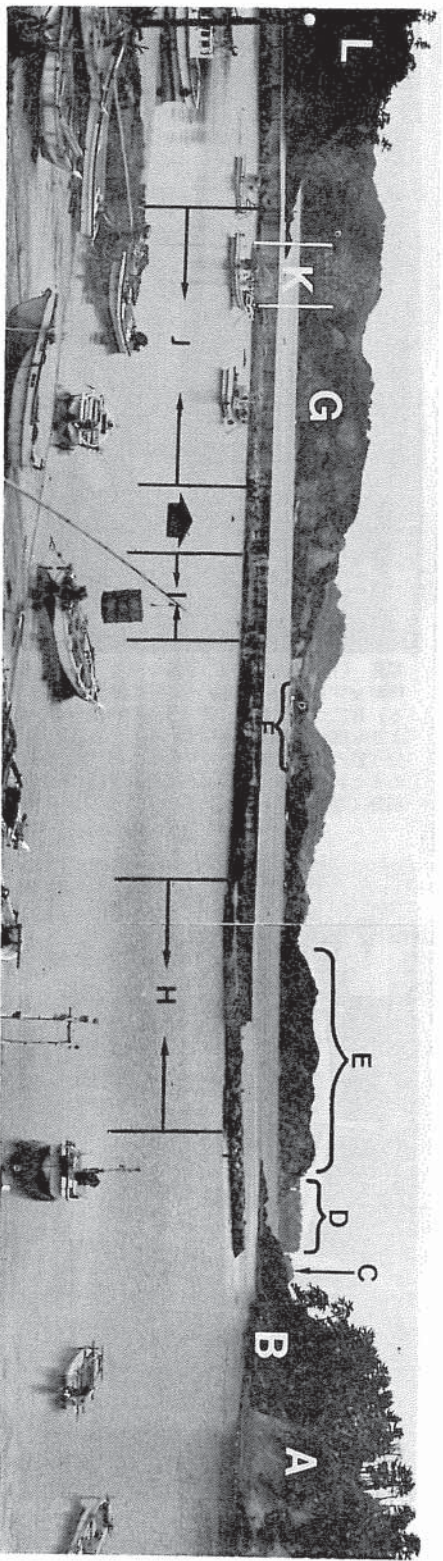


写真 (16) 稲積湾と西方を地図(4)J地点から望む(昭和60年8月15日。永田秋好氏宅二階より標準レンズ)。A夫婦ガ鼻(地図(4)D) B古浦ガ鼻(地図(4)C) C島根町野井の堤島(地図(2)W。頭だけ覗く) D野井の築崩(地図(2)S。東端が見える) E美保岡町空浦の津ノ和(チノワ)鼻(地図(1)Nの北) F美保岡町千酌の海岸(地図(1)L) G鶴音崎(地図(1)J) H東マヅマ I中マヅマ J西マヅマ K葦ガ島(写真(4)D) L奈倉鼻の北端部 太い矢印は小船の航行できた水路

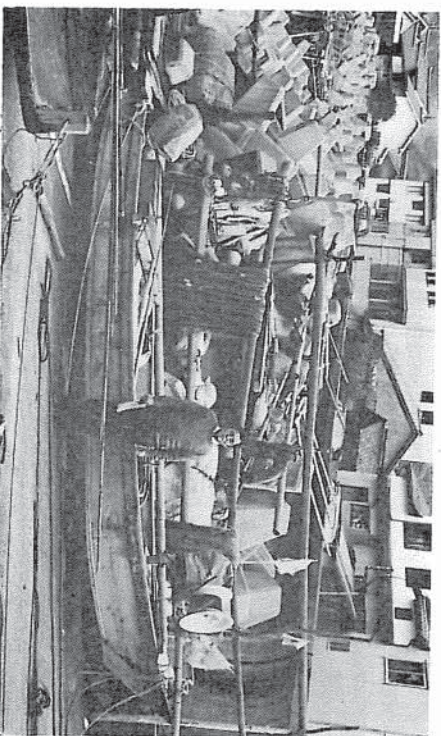


写真 (17) 島根県加賀の伝馬船。全長4.2m、最大幅1.27m、高さ52cm (昭和59年1月21日)。

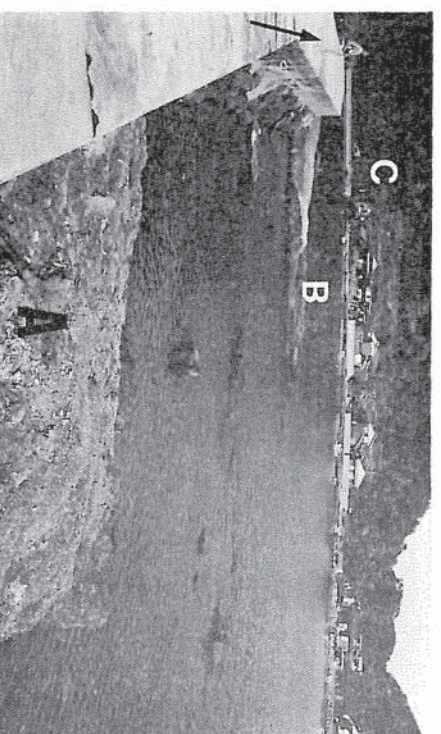


写真 (18) 稲穂の中マヅマの西端から東マヅマを望む (昭和59年10月28日。標準レンズ)。A中マヅマ B東マヅマ C麻仁祖山の西南麓 矢印中島松義氏の立つておられる場所が東マヅマと中マヅマの中間、大小の岩が散乱している。

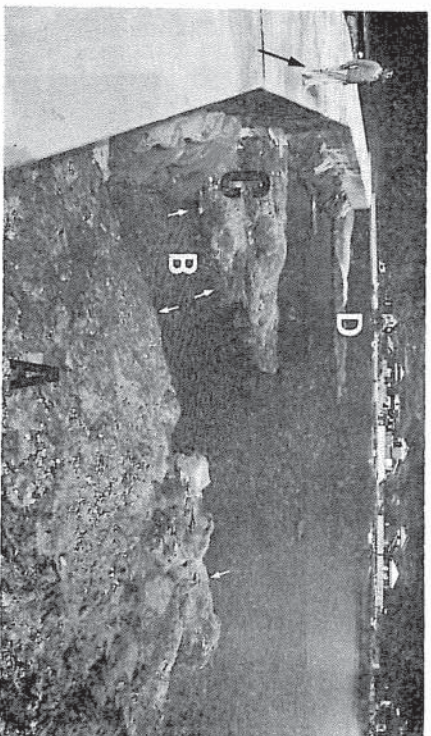


写真 (19) 稲穂の西マヅマの中央から中マヅマと東マヅマを望む (昭和59年10月18日。標準レンズ)。A西マヅマ B小船の航行できた水路 (矢印の中島松義氏の立つておられる所が水路の中央) C中マヅマ D東マヅマ 白の矢印附近一帯は人工の跡を感じさせる箇所。

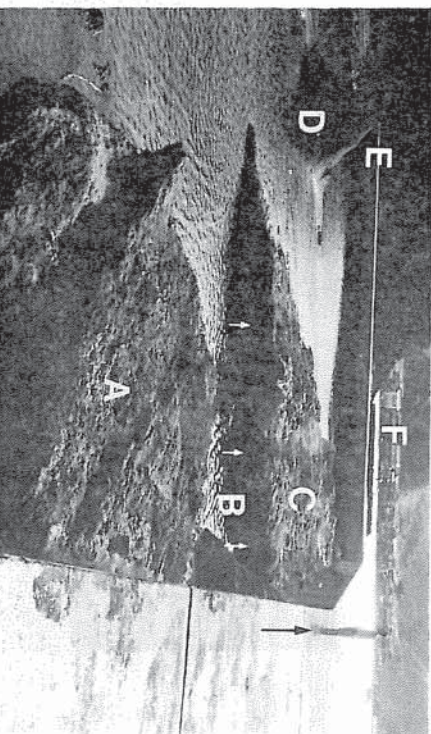


写真 (20) 西マヅマ・中マヅマを東から見る (昭和59年10月28日。標準レンズ)。A中マヅマ B西マヅマと中マヅマの間の水路。矢印中島松義氏の立つておられる所が水路の中央。白の矢印附近は人工の跡を感じさせる。C西マヅマ D葦が島 (写真(K)) E写真(L)撮影地点 (地図(A)I地点) F北浦の人家の東部。北浦からの船はCとEの間を通り稲穂にきた。

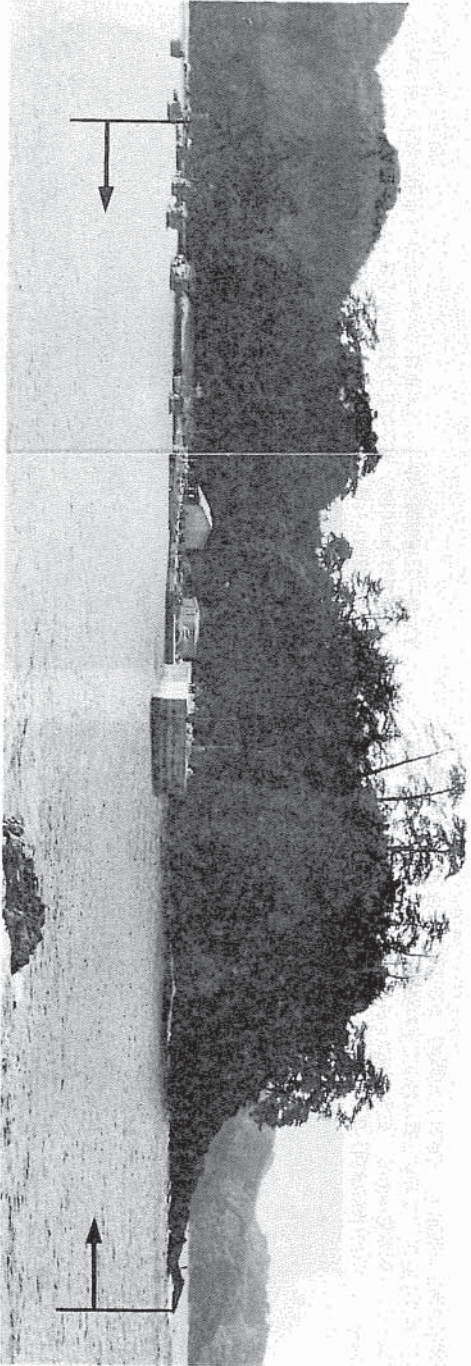


写真 (21) 奈倉岸 (矢印の範囲) を地図(4) I 地点 (写真(2) E 地点) より望む。港は北浦の港 (昭和59年10月28日。標準レンズ)。

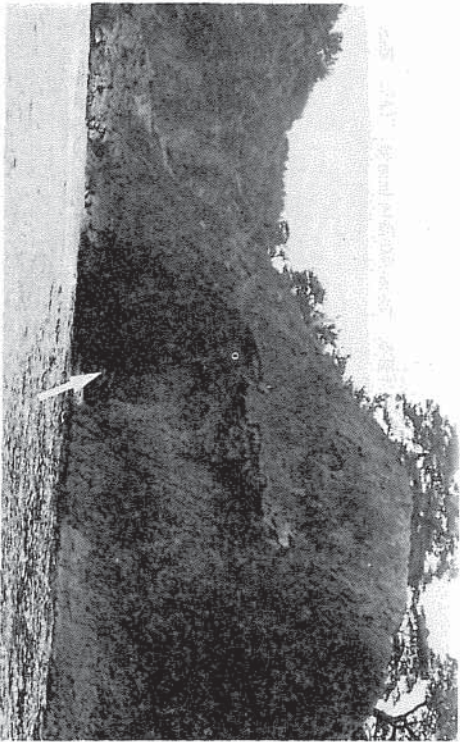


写真 (22) 木島の「穴さん」の入口を北方、地図(5) C 地点より望む。矢印附近に東西の方向に貫けている穴がある (昭和59年10月16日。標準レンズ)。

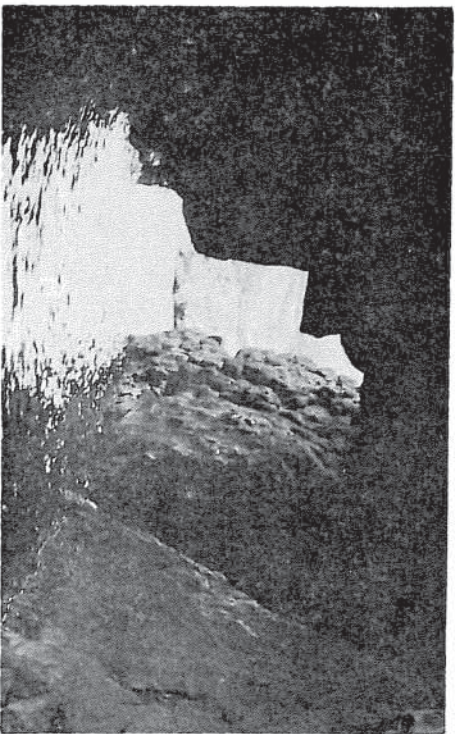


写真 (23) 木島の「穴さん」の東西に抜けている穴を西の入口から見る (昭和59年10月16日。標準レンズ)。